大山崎町埋蔵文化財調査報告書

第52集

—長岡京跡右京第1151次調査—
—長岡京跡右京第1153次調査—

2018

大山崎町教育委員会

R1153 次調査第１・２調査区第３遺構面全景（東から）

序

本書は、平成28年度に行った２件分の発掘調査成果をまとめたものです。

大山崎町字円明寺小字茶屋前で行った調査では、古墳時代の土器を含む流路を検出しました。

大山崎町字円明寺小字里ノ後で行った調査では、奈良時代の掘建柱建物１棟と竪穴建物１棟を検出しました。

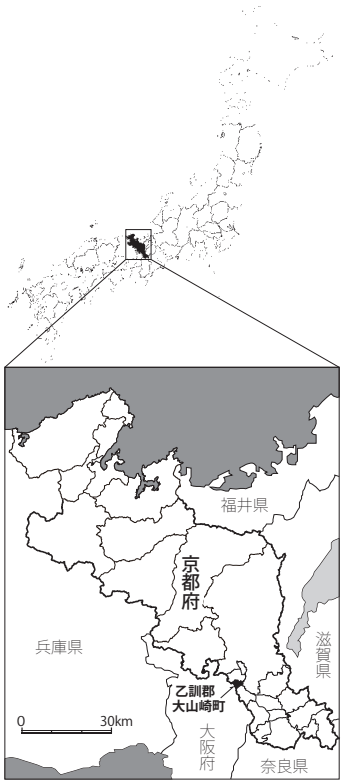
これら２件の調査では、天王山からの水の流れを考えるうえで貴重な成果を得られました。こうした成果は、大山崎町の歴史を考える上で欠かせない資料であります。また、得た資料は、展示・公開を通じて生涯学習の場で広く活用し、郷土の貴重な文化財として受け継いでいく所存でございます。

最後になりましたが、現地調査をはじめ、本書の作成に際しては、土地所有者様をはじめ、関係各機関・多くの皆様よりご高配を賜りました。深く御礼申し上げます。今後とも、文化財の保護と普及に全力を尽くす所存でありますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年３月

大山崎町教育委員会
教育長　清水 清

例　言



1．本書は、大山崎町教育委員会が平成28年度に発掘調査した、２件分の調査報告である。

2．地形区分については、「１：25,000土地条件図京都南部」（国土地理院1966年印刷）、「長岡京市域地形分類図」（『長岡京市史』資料編一付図２,1991年）を参照した。

3．座標系は、日本測地系（国土座標軸第６座標系）を従来通り用いたが、世界測地系を併記した。両座標系での変換作業は行わず、各座標系の基準点から、測量作業を行った。

4．調査次数については、以下の略号を用いた。
長岡京跡右京（R）、同左京（L）、遺跡確認調査（IK）、山城国府跡（K）、山崎津（T）、山崎城跡（YJ）

5．調査地区名は、高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要』1977）による小字名を基にしたアルファベット表記の地区割に準じ、同一地区内における調査回数はアラビア数字を末尾に示した。

6．本文中で使用する「西国街道」は特に断らない限り府道西京高槻線を指す。また、現在の西国街道の下層で検出された（あるいは存在が想定される）道路の名称については、久我畷との交差点より南側を「山陽道」、北側を「古西国街道」と称する。

7．発掘調査では、以下の方々の参加・協力を得た。記して感謝したい。
調査作業員：登山貞男・山口鉄男・山副洋治
全京都建設協同組合・株式会社サポートスタッフ
整理員：岡本弓美子・村上優美子
株式会社文化財サービス

8．現地調査は、大山崎町教育委員会事務局を調査主体とし、生涯学習課文化芸術係主事 角早季子が現地調査を担当した。

9．文化芸術係 古閑正浩・八木麻里の助言・協力を得て、本書の編集・執筆は、 角が当たった。

10. 本書に掲載した遺構写真を角、遺物写真を楠華堂　内田真紀子氏、角が撮影した。遺物、図面、写真は大山崎町教育委員会で保管する。

11. R1153次調査にあたっては、をはじめ下記の方々のご指導をえた。記して感謝する。
中尾芳治、原田昌浩、菱田哲郎

12. 表紙カット：竪穴建物SH201出土土師器甕　報告番号９（S=1/16）

目次

巻頭図版

序

例言

目次

第１章　所収調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　長岡京跡右京 1151 次調査（７ANSCE- ５地区）報告 ・・・・・・・・・・・・3

第１節　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第２節　歴史的環境と位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第３節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第４節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第５節　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第６節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

第７節　R468 次調査（７ANMSC-2 地区）成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第８節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

第３章　長岡京跡右京 1153 次調査（７ANSSR- ８地区）報告 ・・・・・・・・・・・・19

第１節　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第２節　歴史的環境と位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

第３節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

第４節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

第５節　検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

第６節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第７節　R216 次調査（７ANSSR-2 地区）と R463 次調査 (７ANSSZ- ４地区) 成果・12

第８節　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

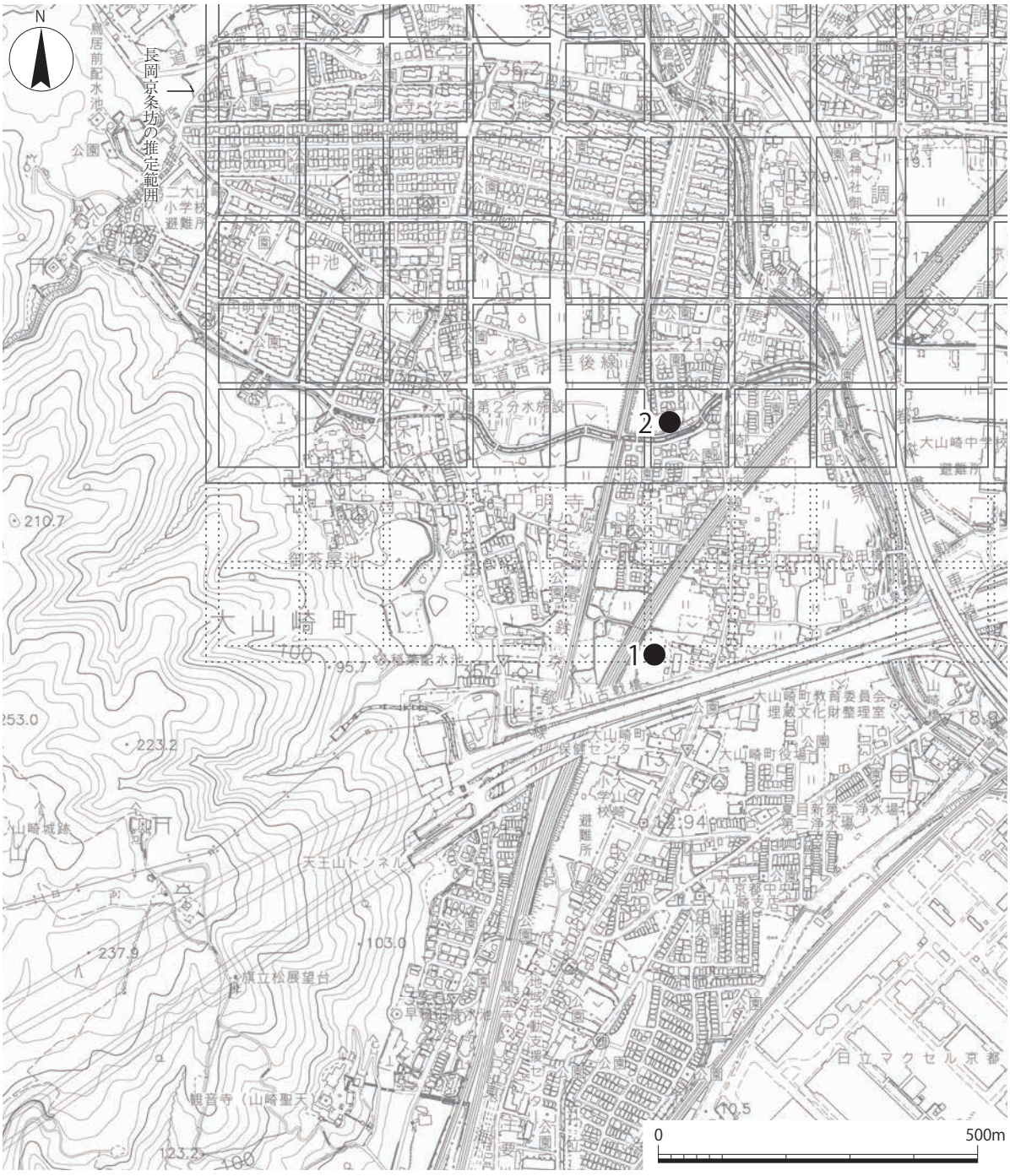
図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・PL. １～ 24

報告書抄録

第１章　所収調査の概要

本書は、平成28年度に行った２件分の発掘調査成果をまとめたものである。以下に所収調査の概要を記す。

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関（調査担当）	面積（㎡）	原因者	調査期間
1	長岡京跡右京第 1151 次調査	7 ANSCE- 5	大山崎町字円明寺小字茶屋前 16 ほか、鉄電 36、38	大山崎町教委（角早季子）	177	（株）大和産業	170105-170220
2	長岡京跡右京第 1153 次調査	7 ANSSR- 8	大山崎町字円明寺小字里ノ後 19 ほか	大山崎町教委（角早季子）	193	（株）信和住宅	170130-170331



第１図　調査地位置図（1/10,000）

遺跡名

1 脇山遺跡
2 鳥居前古墳
3 小倉古墳
4 石倉集石遺跡
5 境野古墳群
6 葛原親王塚遺跡
7 葛原親王屋敷跡遺跡
8 里の後古墳
9 円明寺跡
11 傍示の木古墳
12 白味才古墳
13 大山崎遺跡群
河陽離宮跡
相応寺跡
山城国府跡
山崎駅跡
14 山崎橋跡
15 山崎城跡
16 銭原遺跡
17 山崎遺跡
18 長岡京跡
19 山崎津跡
20 百々遺跡
21 久保川遺跡
22 堀尻遺跡
23 松田遺跡
24 宮脇遺跡
25 下植野南遺跡
26 算用田遺跡
27 鳥居前遺跡
30 金蔵遺跡
31 西法寺遺跡
32 白味才遺跡
33 古城遺跡
34 白味才西古墳
35 鳥居前西遺跡
36 山崎廃寺(山崎院跡)

遺跡の番号は、京都府教育委員会2004年発行『京都府遺跡地図』〔第３版〕に準じたため欠番が存在する。

第２図　大山崎町遺跡地図（1/20,000）

第２章　長岡京跡右京第1151次調査（７ANSCE-５地区）報告

第１節　はじめに

調査地　　大山崎町字円明寺小字茶屋前16ほか、小字鉄電36ほか

所収遺跡　長岡京跡・百々遺跡

条　坊　　右京九条三坊十二町

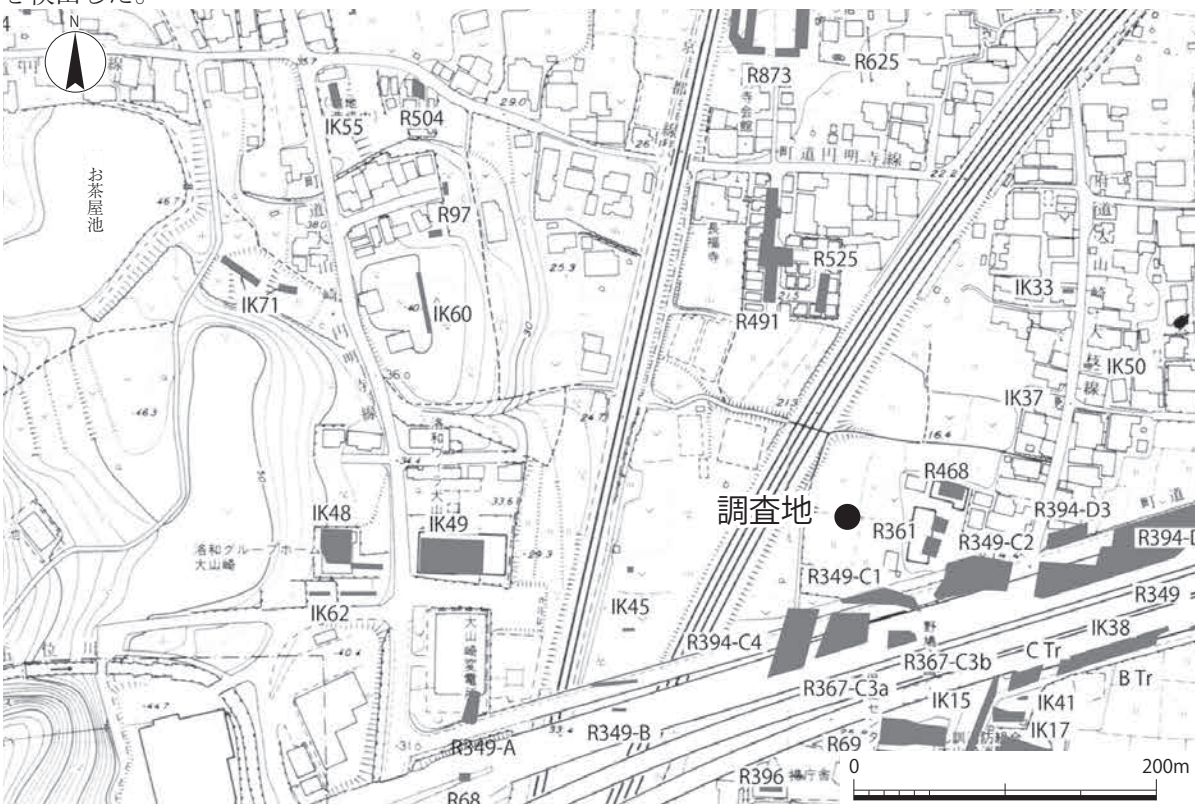
調査期間　平成29年１月５日～２月20日

調査面積　177㎡

第２節　歴史的景観と位置

調査地は、標高約16mの扇状地に位置する。現状は水田であるが、宅地開発に伴い発掘調査を実施した。現在の調査地周辺の農地を潤す水は、お茶屋池を介して、調査地西側を流れる。お茶屋池南側は、小字名が「南谷」であり谷地形であることがうかがえる。IK71次調査においては、水の流れた痕跡を確認した。

周辺の調査としては、南側で行われたR349次調査（京都府センター1998）、調査地の東側で行われたR361次調査（大山崎町教委1991）、調査地の北東側で行われたR468次調査があげられる。R349次調査では、古墳時代の流路と平安時代の西国街道の側溝を検出した。R361次調査では、古墳時代の流路を検出した。R468次調査では、上層に中世の遺構面、下層に平安時代の遺物が混入する流路を検出した。



第３図　調査地位置図（1/5,000）

第３節　調査経過

調査は、平成26年１月５日から２月20日まで実施した。経過は、下記の通りである。

１月５日～１月17日　第１調査区の調査。

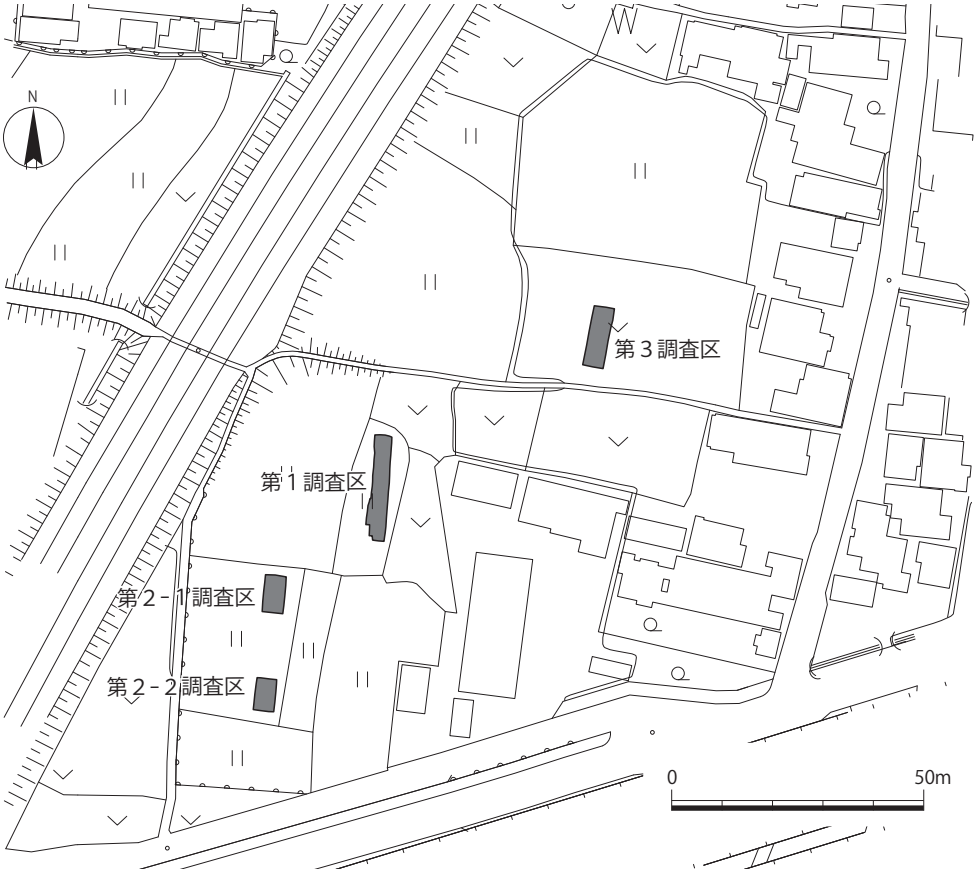
１月23日～１月27日　第２調査区の調査。

２月３日～２月20日　第３調査区の調査。

第４節　基本層序

１　第１調査区、第２調査区の基本層序

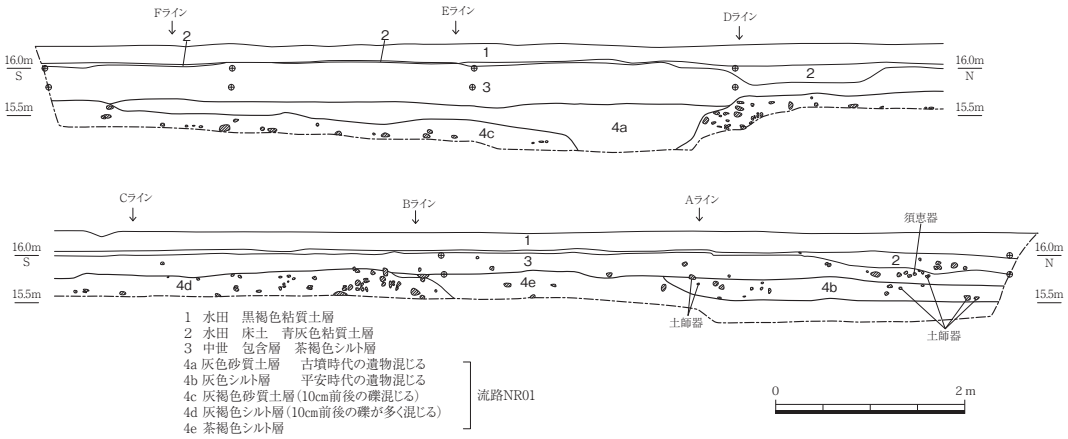
第１調査区と第２調査区は、基本層序が同じである。基本層序は、１～４層に分けられる。１層は黒褐色の粘質土であり、現代の水田の堆積層である。２層は青灰色粘質土あるいは茶褐色シルトであり、水田の床土と考えられる。３層は茶褐色のシルトである。中世の遺物を含む包含層である。４層は灰褐色のシルトや砂質土である。河川堆積であると考え、４層全体を流路NR01とした。基本的には遺物を含まないが、４a層から古墳時代の遺物が出土した。４b層からは平安時代の遺物が出土した。



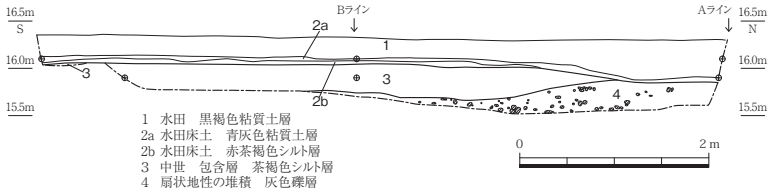
第４図　調査地位置図（1/1,500）

２　第３調査区の基本層序

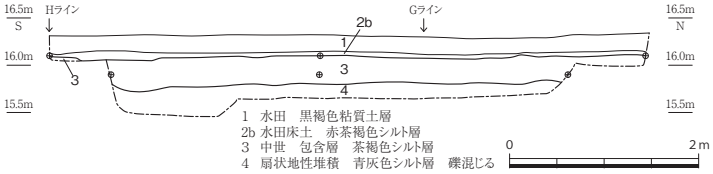
基本層序は、１～５層に分けられる。１a層は、黒褐色粘質土であり、現代の水田の堆積である。１b層は、茶褐色シルトであり、水田の床土と考えられる。２層は黒茶褐色のシルトである。近世の遺物を含む包含層である。３層上面で第１遺構面を確認し、溝SD01を検出した。３層は茶色のシルトである。平安時代前半の遺物を含む包含層である。４層上面で第２遺構面を確認し、溝SD02とピットP03を検出した。４層以下からは遺物の出土はない。地盤層であると考えられる。４層は黄褐色の粘質土である。５層は灰褐色あるいは灰色であり、礫が混じる。



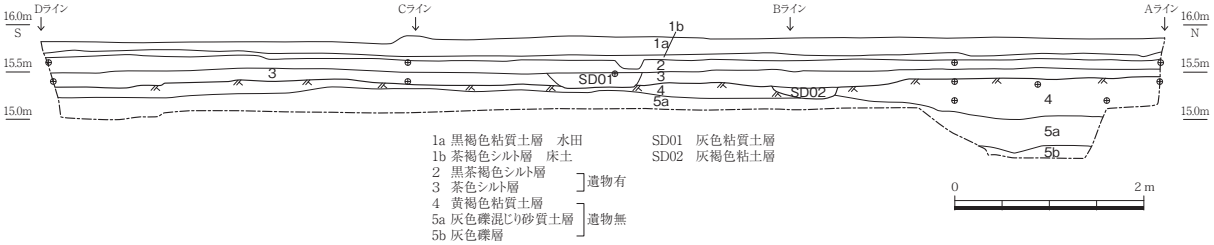
第５図　第１調査区断面図（1/80）



第６図　第２- １調査区断面図（1/80）



第７図　第２- ２調査区断面図（1/80）

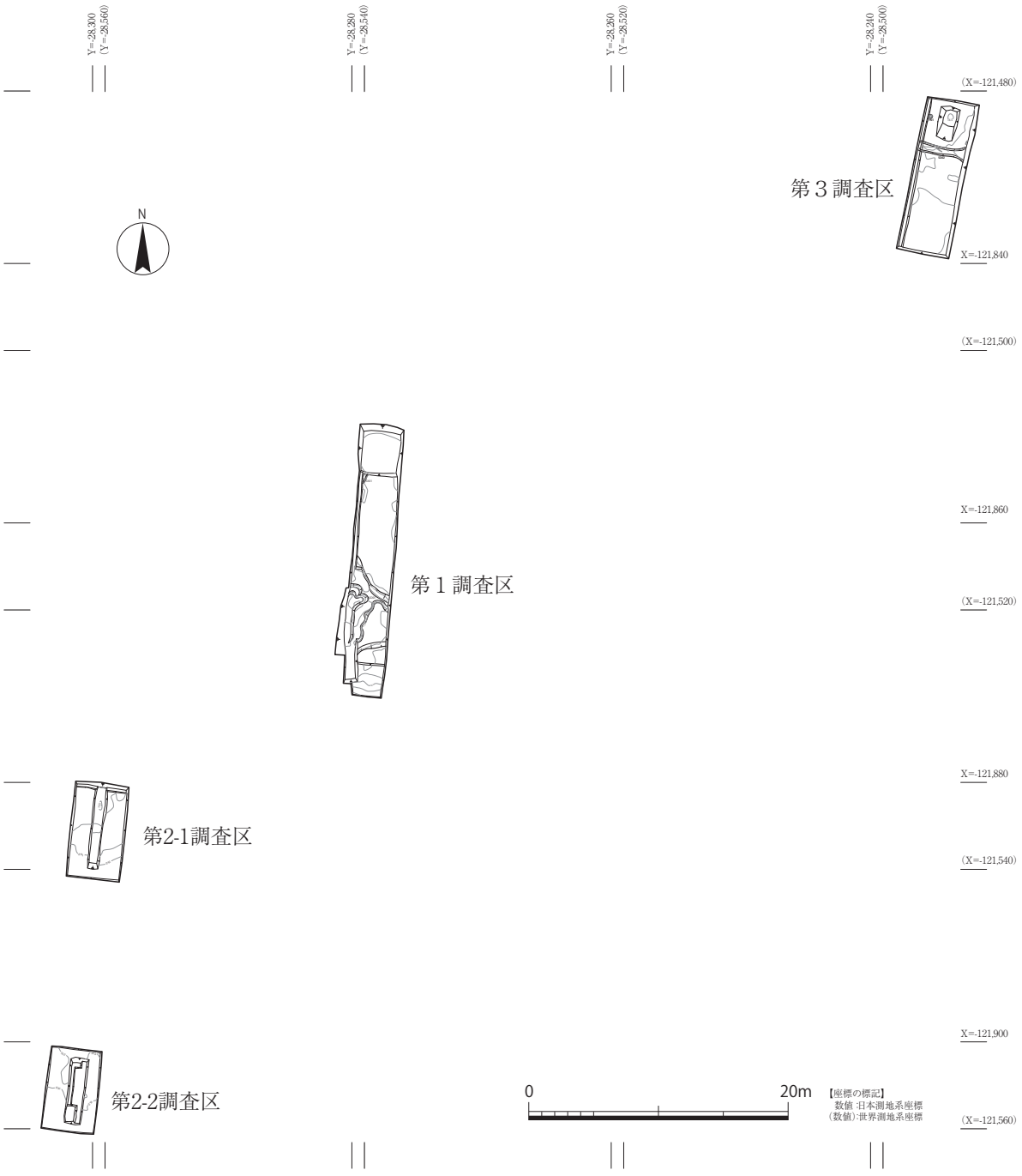


第８図　第３調査区断面図（1/80）

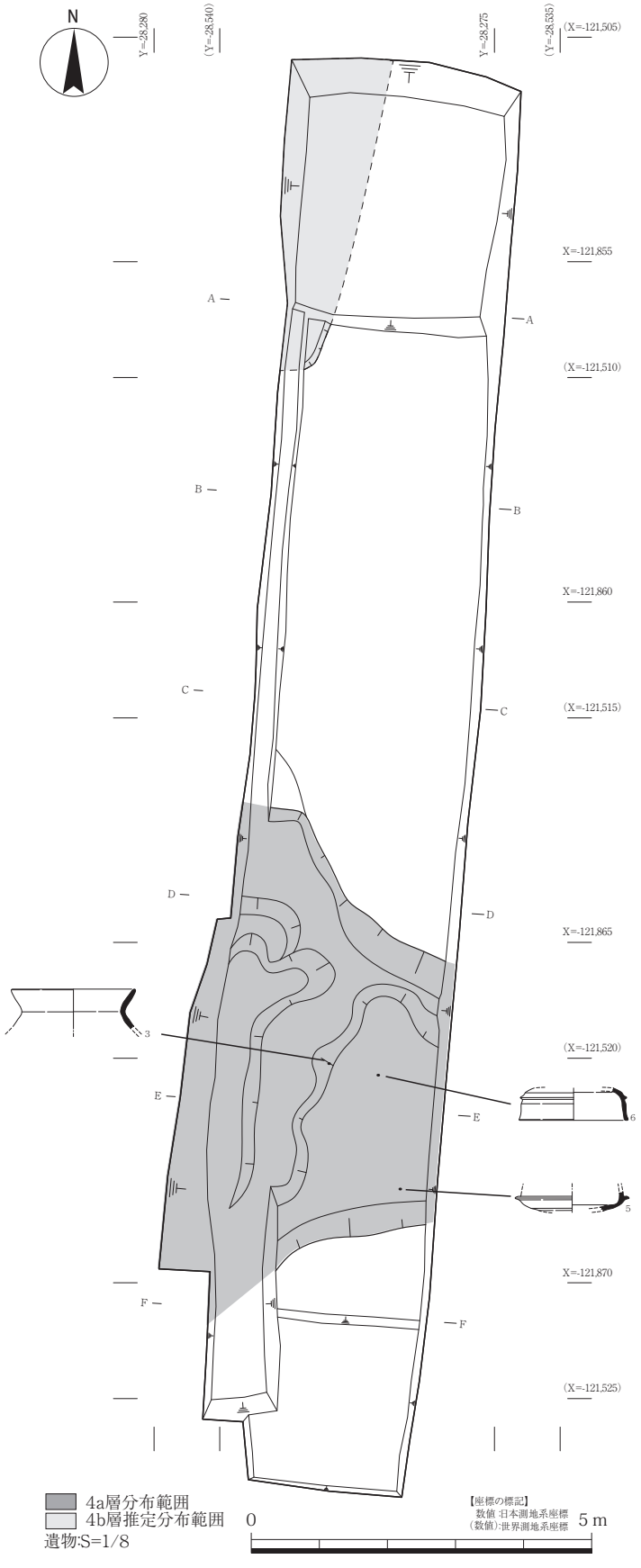
第５節　検出遺構

１　第１調査区、第２調査区検出遺構

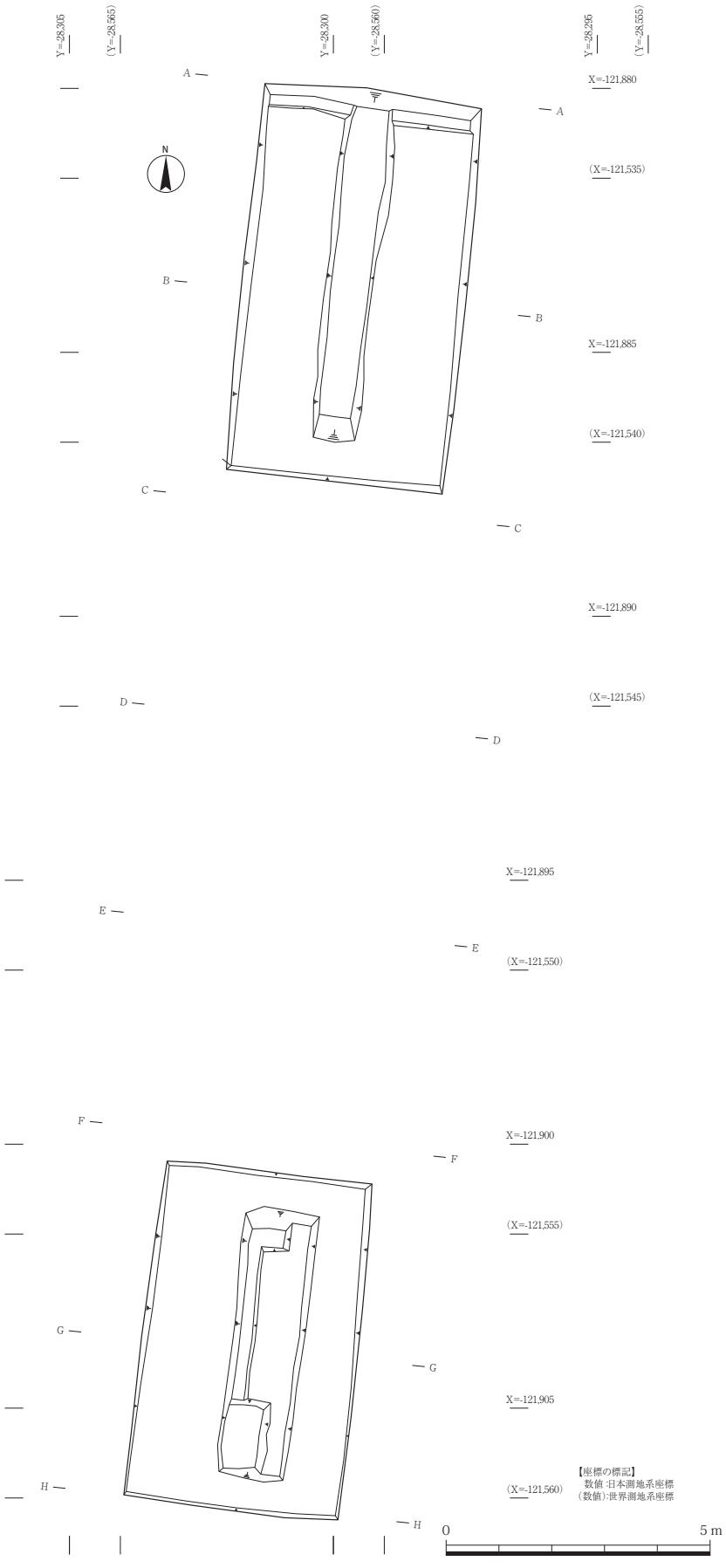
流路NR01　２層の下層で検出した。流路の肩は未検出である。また、流路の底も未検出である。第１調査区では、４a層から古墳時代のTK208型式に比定される遺物が出土した。４b層からは平安時代の平安京土器編年Ⅲ古期（930～960年頃）（註１）に比定される遺物が出土した。



第９図　調査区配置図（1/500）



第 10 図　第 1 調査区平面図（1/100）



第 11 図　第 2 調査区平面図（1/80）

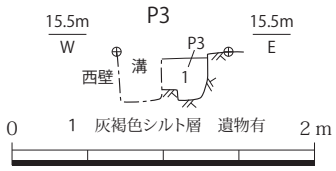
2　第３調査区検出遺構

２面の遺構面を確認した。第１遺構面は３層上面で検出し、出土遺物から近世に比定される。溝SD01を検出した。第２遺構面は４層上面で検出し、出土遺物から平安時代前期に比定される。溝SD02、ピットP3を検出した。

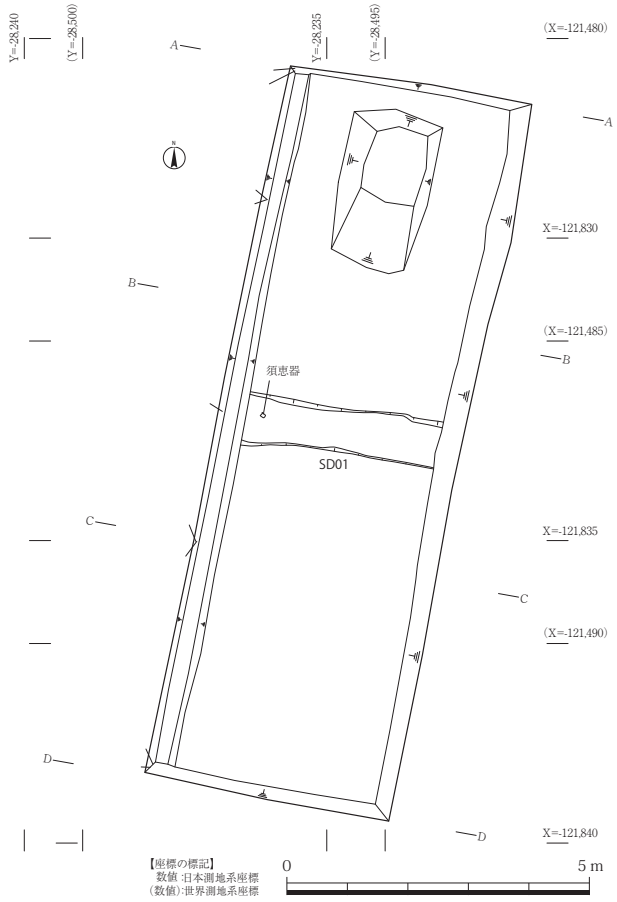
溝SD01　幅約50cm、深さ15cmである。東西方向の溝である。出土遺物から溝SD01は近世まで機能していた。

溝SD02　幅40cm、深さ10cmである。東西方向の溝であり、溝SD01にほぼ平行する。

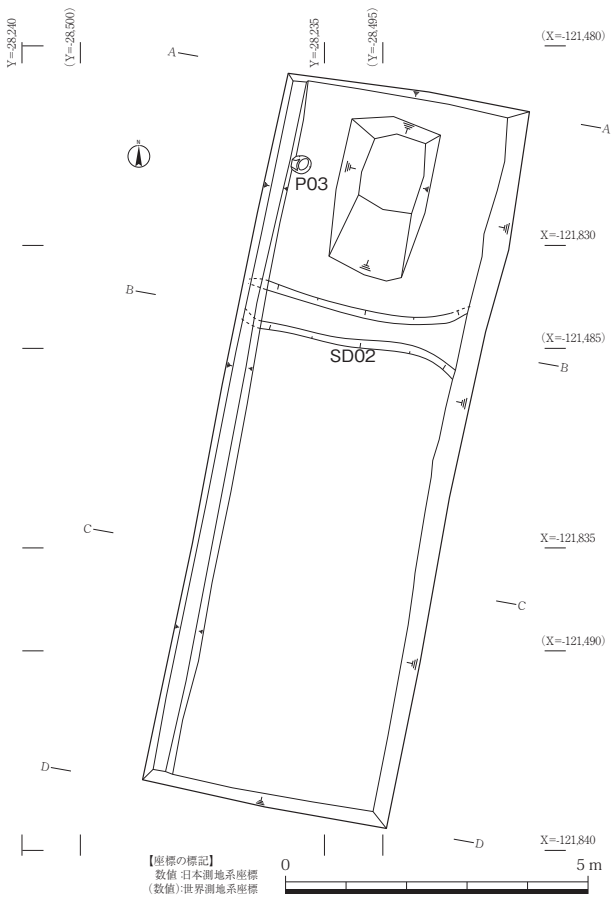
ピットＰ３　直径15cm、深さ30cmである。



第 12 図　ピット P3 断面図(1/50)



第 13 図　第３調査区上層遺構平面図（1/80）



第 14 図　第３調査区下層遺構平面図（1/80）

第６節　出土遺物

全体でコンテナ４箱分の遺物が出土した。取り上げには、南北方向には北からアルファベットでAから順に、東西方向には東からアラビア数字で１から順に３ｍごとのグリット（第10図、第11図、第13図）を設けた。

１　第１調査区出土遺物

流路NR01の４a層から古墳時代の土器が出土した。第３層からは平安京土器編年Ⅲ古期（930～960年頃）に比定される土器が出土した。第２層からは小片で図化に耐えうるものはなかったが、中世に比定される瓦器や土師器の小片が出土した。

弥生土器は、壺の底部（１）が出土した。重機掘削の際に出土したため正確な層位は不明である。

流路NR01４a層　土師器と須恵器が出土した。これらは、古墳時代中期の遺物である。須恵器の器形はTK208型式に比定される。

土師器は、壺（２）、甕（３）がある。２は、口縁部は直立し、口縁端部を丸く収める。口径が12.4cmと小型である。

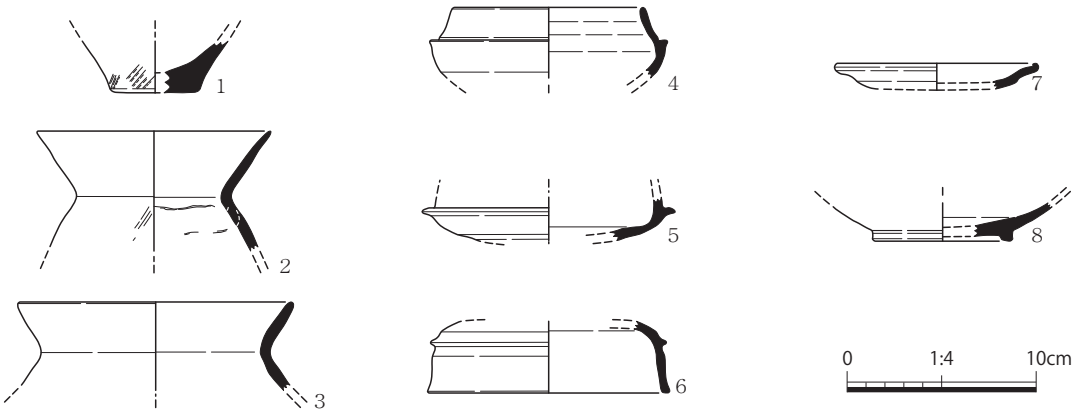
須恵器は、杯身（４、５）と杯蓋（６）がある。４は立ち上がりは1.9cmを測り、やや内側に湾曲する。５は、受け部から１cm下位はケズリによる整形を施す。６は、稜線から４㎜上位はケズリによる整形を施す。

流路NR01４b層

土師器の皿（７）が出土した。口縁端部は内傾し、手の字状になりかけている。平安京土器編年Ⅲ古期（930～960年頃）に比定される。

第３層　緑釉陶器を図示した。

緑釉陶器は、皿（８）がある。はりつけ高台である。



第 15 図　第１調査区出土遺物

２　第３調査区出土遺物

溝SD02および第３層からは平安時代前半の遺物が出土した。SD01からは近世の土器が出土した。

溝SD02　須恵器が出土した。平安時代前期に比定される。

須恵器は、杯B（９、10）がある。高台の張り付く位置は、屈曲部よりやや内側である。

第３層　土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、土馬が出土した。土師器、須恵器の時期から平安時代前期に比定される。

土師器は、杯A（11）がある。口縁端部がやや外反する。平安京土器編年Ⅲ期（930～960年頃）に比定される。

須恵器は、杯B（12、13）、壺（14）、蓋（15）がある。杯Bの高台の張り付く位置は、屈曲部よりやや内側である。

緑釉陶器は、椀（16）がある。はりつけ高台である。

灰釉陶器は、椀（17）がある。

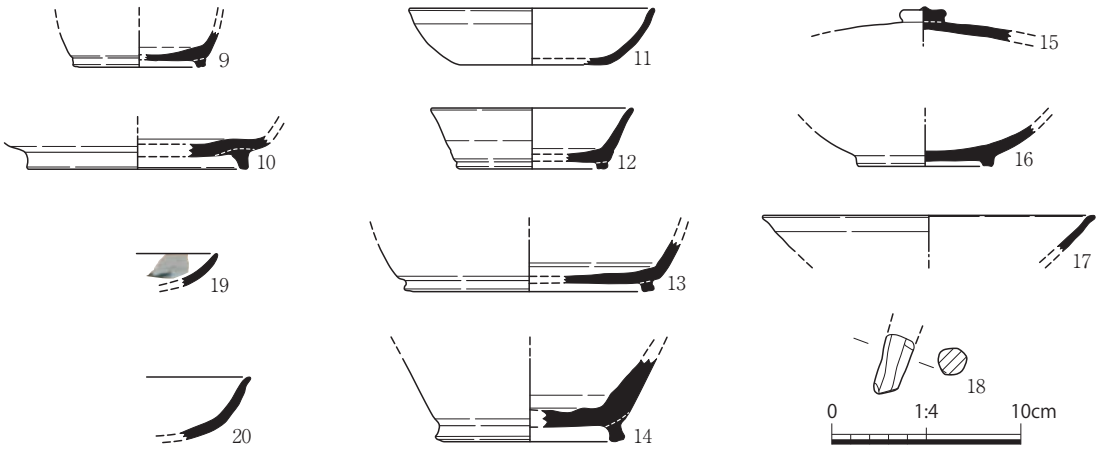
18は、**土馬**の脚部の破片である。

溝SD02　磁器が出土した。近世であると考えられる。

磁器は、染付皿（19）がある。

２層　平安時代前半に比定される土師器、須恵器が多く出土した。これらは、第２遺構面の時期に比定されるため、下層の遺物が含まれたと考えられる。近世の遺物も少量出土することから、２層の形成は近世と考えられる。

土師器は、杯（19）がある。口縁端部がやや外反する。平安京土器編年Ⅲ期に比定され、３層出土の土師器と同様の特徴を示す。



第 16 図　第３調査区出土遺物

第７節　R468次調査（７ANMSC-２地区）成果

R468次調査は、本調査地の北東で行われた調査である。本調査地を理解する上で不可欠な情報であるため以下に収載する。R468次調査は、大山崎町字円明寺小字茶屋前31番地の共同住宅建設に伴って実施された。調査期間は平成６年４月25日～同年６月17日である。調査面積は、130㎡である。

検出遺構　遺構面は２面確認された。上層を第１遺構面、下層を第２遺構面とする。

第１遺構面からは、ピットや溝を検出した。遺物は、散漫であるが中世と考えられる。第２遺構面からは、流路NR021を検出した。流路NR021は、幅３～3.5m深さ0.9mを測る。後述の遺物の時期から平安時代～中世にかけて機能した流路と考えられる。

出土遺物　コンテナ６箱分の遺物が出土した。その内、流路NR021から出土した遺物を掲載する。流路から出土する遺物は、大半が平安時代前半に比定される遺物である。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒平瓦、銭貨が出土した。最上層からは少量の中世の遺物が出土する。瓦器（12、13）を図示した。

土師器は、皿（１～３）がある。口縁部は外反した後、底部とほぼ平行方向に屈曲する。口縁端部は内側に巻き込む。３は、いわゆる手の字口縁を呈する。平安京土器編年Ⅱ中～Ⅲ中期（870～980年）に比定される。

須恵器は、杯B（４）、蓋（５）がある。４は、体部の屈曲する位置に高台が張り付く。

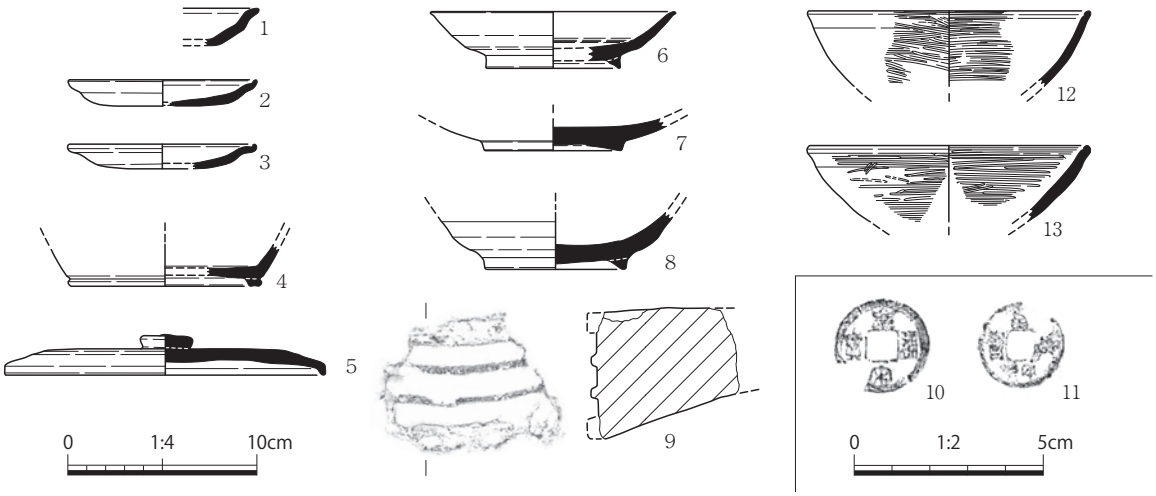
緑釉陶器は、皿（６）、皿あるいは椀（７）がある。６は貼付高台である。高台は幅４㎜であり、シャープな形を呈する。７は、削り出し高台である。

灰釉陶器は椀（８）がある。

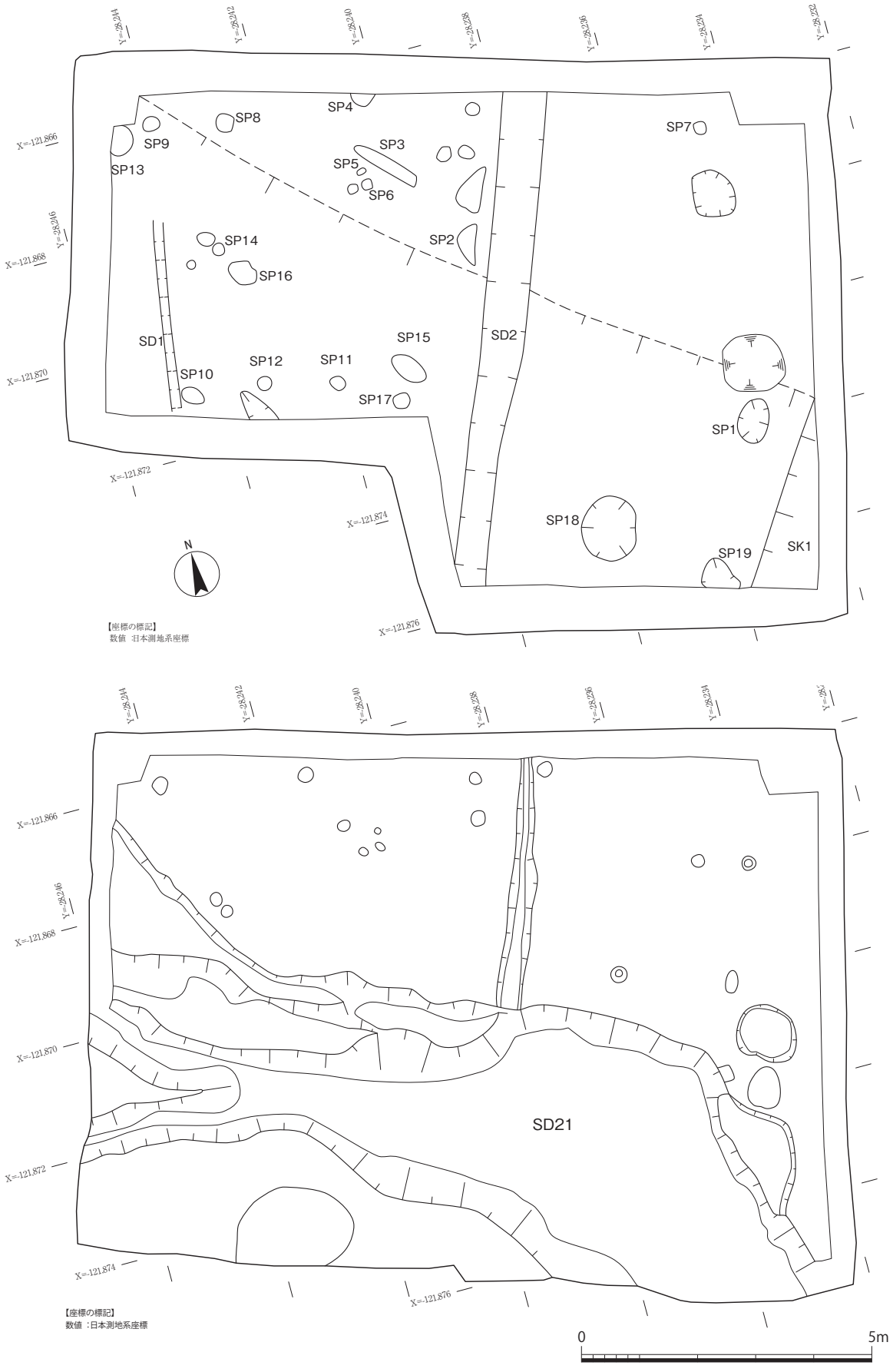
軒平瓦は、重圏文軒平瓦（９）がある。内区は二重圏線である。厚さ6.5cm以上、内区厚4.3cm、圏外厚2.3～2.7cm、上弧上外縁間厚0.9cm、上弧厚0.8cm、圏内厚0.8cm、下弧厚0.7cm、下弧下外縁間厚0.9cm（註２）である。厚さ6.5cm以上であるため、難波宮式軒平瓦6572型式C種と考えられる。

銭貨は、皇宋通寶（10）、富壽神寶（11）がある。

瓦器は、椀（12. 13）がある。



第 17 図　R468 出土遺物（1/ 4）



第 18 図　R468 遺構平面図（上図：第 1 遺構面（上層）、下図：第 2 遺構面（下層））(1/100)

第８節　まとめ

１　調査の概要

第１調査区、第２調査区は、流路NR01（４層）と中世の包含層（３層）を検出した。流路NR01は、現在のお茶屋池付近を取水口とし、IK71次調査が行われた南谷を通って調査地に達すると考えられる。流路NR01の中央部に分布する堆積土（４a層）からは、古墳時代中期のTK208型式に比定される須恵器が出土した。４a層からは、この遺物の外面はそれほど摩耗していない。このことから、周辺では古墳時代中期の人びとが生活していたと考えられる。調査地の西側のIK48次調査とIK49次調査では、横穴式石室の一部と考えられる遺構と耳環が出土した（大山崎町教委2004）。これらの調査成果から、調査地の西側には古墳時代後期の群集墳が広がると考えられる。後述するように、調査地の南東側のR349次調査（京都府センター1998）では古墳時代中期の流路を検出した。今回検出した流路の延長にあたると考えられる。

４b層からは平安時代の遺物が出土した。調査地の東側で行ったR468次調査（第２章第７節）において平安時代の流路を検出しており、今回検出した流路の延長にあたると考えられる。

中世になると流域に変化があり、第１調査区、第２調査区の地盤が安定し（３層）、包含層を形成した。お茶屋池は平安時代末から鎌倉時代初頭に活躍した西園寺公経の円明寺山荘の遺構の一部であると考えられている（大山崎町教委1982）。お茶屋池の成立によって水の流れが管理され、貯留地と流域の一体的開発が想定される。

第３調査区は２面の遺構面を確認した。第１遺構面は近世に比定される溝１条を検出した。第２遺構面は平安時代前期に比定される溝１条を検出した。これらは、地形に規制されてほぼ同一方位を示す。

２　百々遺跡の成立と流路・溝について

本調査地は、百々遺跡の範囲に含まれる。百々遺跡は、平安時代（９世紀初頭から11世紀初頭）に古西国街道の成立に伴って遺構・遺物が多く分布する遺跡である。古西国街道の周辺には掘立柱建物や井戸等が検出された。また、木簡、陶硯、銭貨、緑釉陶器、灰釉陶器など平安京と同等の遺物が出土する。今回は、百々遺跡で検出した古墳時代の流路や溝と平安時代の溝を比較する。このことによって、古西国街道成立に伴う水の管理のありかたについて検討する。

古墳時代の流路は、本調査地、R361次調査（大山崎町教委1991）、R349次調査D1地区、IK38次調査Bトレンチ（京都府センター2001）で検出された。本調査地の４a層からはTK208型式に比定される杯身、杯蓋が出土した。R361次調査溝SD01からは古墳時代中期に比定される土師器が出土した。R349次調査D1地区流路SR34951からは古墳時代中期に比定される土師器壺が出土した。R349次調査D1地区流路SR34952からはTK208型式に比定される杯身が出土した。IK38次調査の自然流路からは古墳時代の土師器片が出土した。また、IK38次調査Cトレンチ溝SD17、IK41次調査溝SD02、IK17次調査溝SD04、IK18次調査溝SD8からは古墳時代中期に比定される土師器が出土した。IK38次調査Aトレンチは、調査区全体が粘土の堆積であり、淀川の入り江であることがうかがえる。

これらの調査成果から大正11年（1992年）測図京都市都市計画図を用いて第19図のように水の流れ

を復元した。等高線の走行から、北西が高く南東に向かって下がる地形であることが分かる。古墳時代の流路はこの地形に規制されて流れ、R439次調査D1地区の手前で二股に分かれる。IK38次調査の手前で溝が掘削され、一部は南西に流れる。これらの流路や溝からは古墳時代の遺物が混じり、流路や溝のつながりが追える遺構として註目される。

平安時代の流路は、本調査地とR468次調査で検出した。平安時代の溝としては、古西国街道の側溝と居住域内部の溝に分けられる。古西国街道の東側の側溝はR349次調査C２地区、R69次調査（大山崎町教委1984）、R159次調査（大山崎町教委1017）、IK74次調査（大山崎町教委2017）で検出した。古西国街道の西側の側溝はR349次調査D3地区、R349次調査D1地区、IK15次調査（京都府センター1991）で検出した。集楽内部の溝としてはR349次調査の溝SD34953があげられる。これは、古墳時代の段階では北から南に流れていた流路の付け替えが指摘されている（京都府センター1998）。西から東に流した後、北から南に屈曲させるように掘削されており、人工的な溝である。

これらの調査成果から第20図のように水の流れを復元した。天王山の水源から古西国街道に至る流路は古墳時代の流路をほぼ踏襲する。古西国街道にいたると、街道には側溝が掘削される。また、居住域を迂回するように掘削された溝も検出している。西国街道周辺が居住域となることに伴い、自然流路から人工的に掘削された溝へと変わり、水の流れが管理されるようになったと考えられる。

３　まとめ

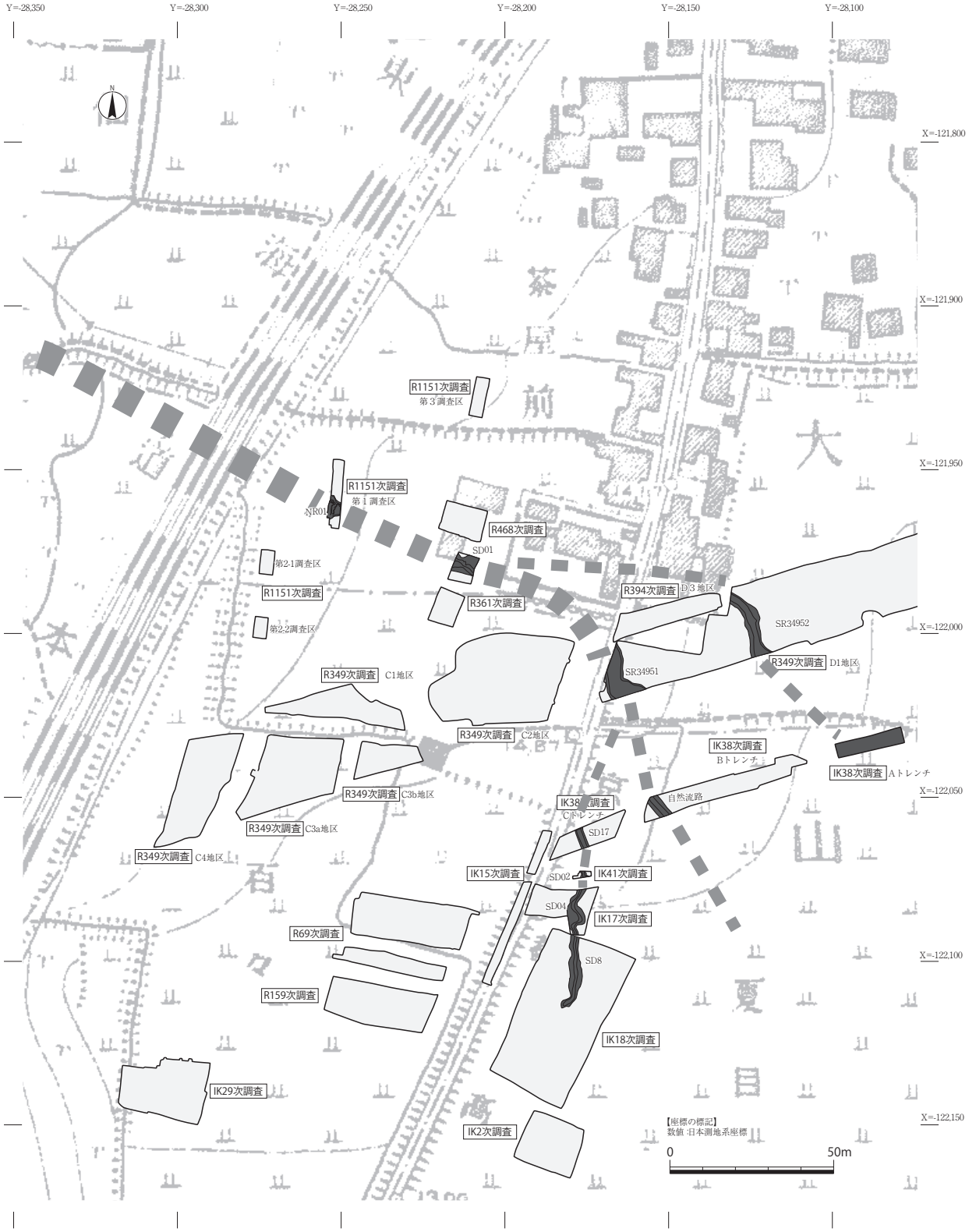
今回の調査によって古墳時代中期と平安時代の流路の遺物を含む流路を検出した。このとによって、百々遺跡の流路について検討を行った。また、第３調査区の地盤は比較的安定していることから、流路は第３調査区には至らないことがうかがえる。

中世以降は古西国街道周辺の遺構が希薄になり、遺物はほとんど出土しない。中世にはお茶屋池が成立する。お茶屋池の成立と第１調査区と第２調査区に中世の包含層が存在することは連動すると考えられる。百々遺跡の中世の水の流れを検討することは、円明寺山荘の成立を考える上でも重要である。今後は中世の流路あるいは溝を検出することによって中世の土地利用のあり方を検討したい。

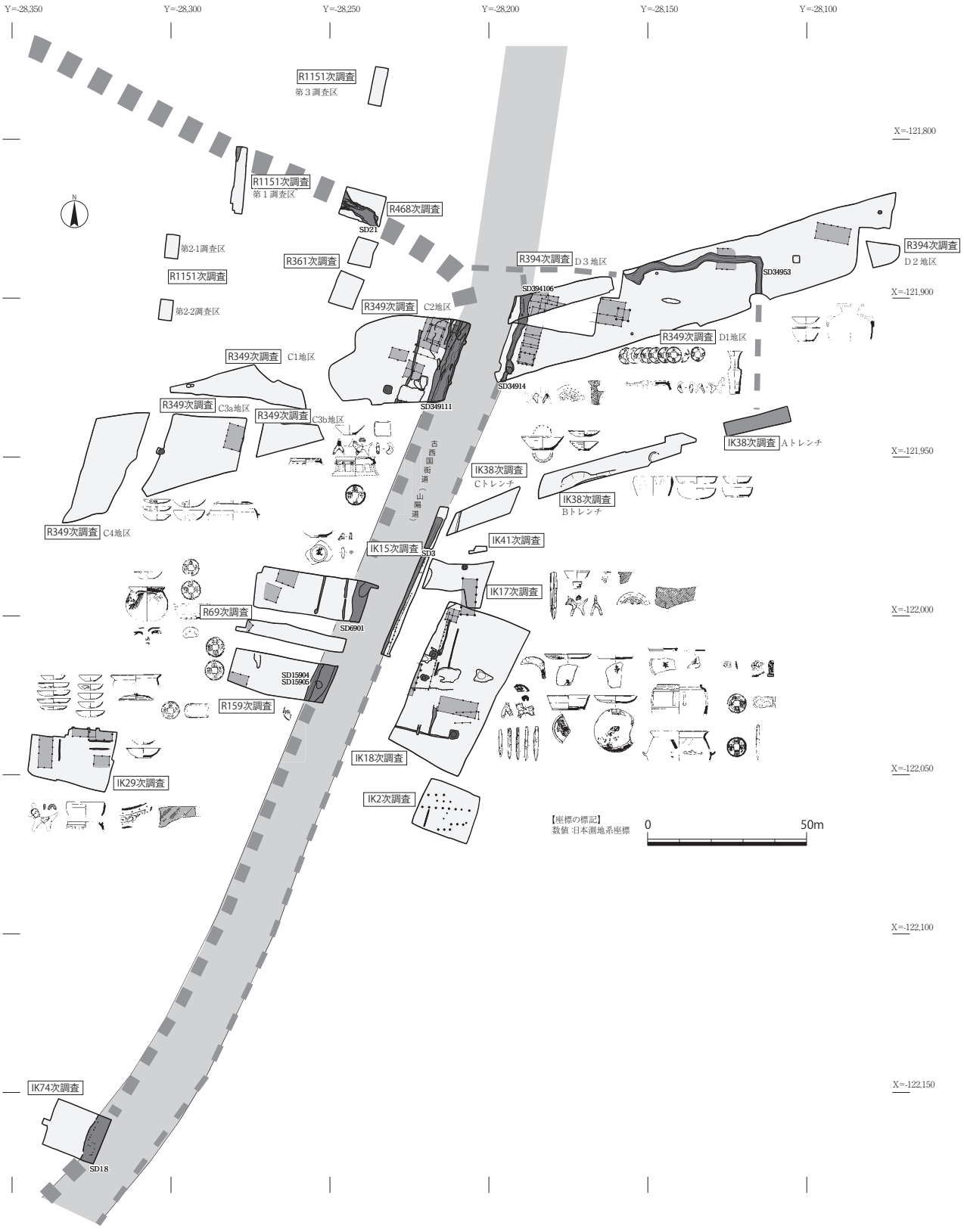
【註】
註１以下平安京土器編年には、小森1994、小森・村上1996を参照する。
註２

【参考文献】
岩松保1998「D調査区の調査」『京都府遺跡調査報告書』第24冊（『百々遺跡』）（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
森俊寛1994「土師器・黒色土器・瓦器」（財）古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店
小森俊寛・村上憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所
大山崎町教育委員会1982『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第３集
大山崎町教育委員会1984『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第４集
大山崎町教育委員会1991『大山崎町の発掘』（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第10集）
大山崎町教育委員会2004『大山崎町文化財年報』平成14年度
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1991『京都府遺跡調査概報』第42冊
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター1998『京都府遺跡調査報告書』第24冊（『百々遺跡』）
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2001『京都府遺跡調査概報』第101冊

＊本文中では大山崎町教育委員会→大山崎町教委、（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター→京都府センターとする。



第 19 図　百々遺跡における古墳時代中期の流路（1/1,800）



第 20 図　百々遺跡における平安時代の溝（1/1,800）

表 1　R1151 次調査出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量（cm）			色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考
					口径	器高	底径			（内面）	（外面）			
1	15	1Tr 重機掘削	弥生土器	壺	-	(2.7)	[4.8]	内外面）2.5Y6/1 黄灰・7.5YR7/4 にぶい橙 断面）2.5Y6/1 黄灰	密 3(1) チ、石、長	ナデ	タタキ、ナデ	硬	T2/5	
2	1	1Tr 4a 層	土師器	壺	12.4	(6.3)	-	桃茶褐色	赤色粒、長石、石英微粒	磨滅	摩滅わずかにハケ残る	やや軟	頸部 1/2 弱	布留 2 ～ 3
3	16	1Tr 4a 層	土師器	甕	[14.6]	(4.7)	-	内外面）2.5YR6/8 橙 断面）2.5YR6/8 橙	密 3(1.5) チ、石、長	ナデ	ヨコナデ、ナデか	硬	K1/5	
4	8	1Tr C 区 3 層	須恵器	杯身	[10.2]	(3.7)	-	内外面）N6/0 灰 断面）N6/0 灰	密 1(0.5) 長、石、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ケズリ	硬	K1/5	
5	3	1Tr 4a 層	須恵器	杯身	最大径 13.4	(2.3)	-	暗青灰色	長石、黒色粒	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	良好	小片	TK208
6	2	1Tr 4a 層	須恵器	杯蓋	12.8	(3.8)	-	外面）暗灰色 断面）淡灰色	長石、石英粒子	ロクロナデ	ケズリ、ロクロナデ	良好	口縁 1/8 弱	TK208
7	17	1Tr 4b 層	土師器	皿	[10.8]	(1.4)	-	内外面）10YR7/2 にぶい黄橙 断面）10YR6/1 褐灰	密 1(0.5) 赤、チ	ヨコナデ	ヨコナデ、オサエ	硬	K1/6	
8	12	1Tr F 区 3 層	緑釉陶器	皿	-	(2.0)	[7.4]	内外面）淡い黄緑（釉） 断面）10YR8/3 浅黄橙	密 1(0.5) 長、チ	ミガキのち施釉	ミガキ、削り出し高台、ミガキ、のち施釉	軟	T1/6	
9	11	3Tr SD02	須恵器	杯 B	-	(1.9)	[7.0]	内外面）N6/0 灰 断面）N6/0 灰	密 1(0.5) 長、石、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切りのちナデ	硬	T1/4	
10	5	3Tr SD02	須恵器	杯 B	-	(1.7)	11.7	内面）淡灰褐色 外面）黒色	白色粒子、黒色粒子、石英微粒	ナデ	ロクロナデ、貼付高台、ナデ	良好	高台部 1/4	
11	19	3Tr A 区 3 層	土師器	杯	[13.0]	(3.0)	-	内外面）7.5YR7/6 橙 断面）7.5YR7/6 橙	密 2(1) 赤、長	ヨコナデ、ナデか	ヨコナデ、磨滅の為調整不明	軟	K1/6	
12	6	3Tr A 区 3 層	須恵器	杯 B	[10.7]	3.2	[8.0]	内外面）N6/0 灰 断面）N6/0 灰	密 1(0.5) 長、石、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切りのちナデ	硬	K1/8、T1/6	
13	7	3Tr A 区 3 層	須恵器	杯 B	-	(2.7)	[13.2]	内外面）N6/0 灰 断面）N6/0 灰	密 1(0.5) 長、石、チ	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切りのちナデ	硬	T1/4	
14	4	3Tr A 区 3 層	須恵器	壺	-	(4.4)	10.0	灰色	長石粒、石英粒	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ナデ	良好	底部 1/3	
15	9	3Tr B 区 3 層	須恵器	蓋	-	(1.8)	-	内外面）5Y7/1 灰白 断面）5Y7/1 灰白	密 1(0.5) 長、石、チ	ロクロナデ	ツマミ貼付時のナデ、ヘラ切りのちナデ	硬	K-、T-	
16	10	3Tr B 区 3 層	緑釉陶器	椀	-	(2.2)	[7.2]	内外面）深緑 断面）N6/0 灰	密 1(0.5) 長、チ	ロクロナデのちミガキのち施釉	回転ケズリ、削り出し高台、回転ケズリ、のち施釉	硬	T1/4	
17	13	3Tr B 区 3 層	灰釉陶器	椀	[17.6]	(1.9)	-	内外面）淡い黄緑（釉） 断面）2.5Y8/2 灰白	密 (0.5) 赤	ミガキのち施釉	ロクロナデのち施釉	硬	K1/12	
18	18	3Tr C 区 3 層	土製品	土馬	高さ (3.1)	幅 1.5	厚さ 1.4	外面）5YR7/4 にぶい橙 断面）5YR7/4 にぶい橙	密 2(1) チ、石、雲	ナデ	ナデ	硬	K-、T-、破片	
19	14	3Tr SD01	染付	皿か	-	(1.7)	-	内外面）薄い青灰（釉） 断面）N8/0 灰白	密 (0.5 以下) 微粒子	施釉	施釉	硬	K 破片	
20	20	3Tr A 区 2 層	土師器	杯	-	(3.3)	-	内外面）7.5YR7/6 橙 断面）7.5YR7/4 にぶい橙	密 2(0.5) 赤、石、雲	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	硬	K 破片	

表 2　R468 次調査出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量（cm）			色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考
					口径	器高	底径			（内面）	（外面）			
1	3	SD021 畔深堀	土師器	皿	-	2.0	-	内外面：10YR8/3 浅黄橙 断面：10YR7/2 にぶい黄橙	密 0.5(0.5) 石、雲、赤	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	硬	破片	
2	2	SD021 最上層	土師器	皿	[10.0]	1.4	-	内外面：7.5YR8/3 浅黄橙 断面：7.5YR8/3 浅黄橙	密 1.0(1.0) 赤、石	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	硬	K1/4	
3	1	SD021 畔深堀	土師器	皿	[10.0]	1.2	-	内外面：10YR8/3 浅黄橙 断面：7.5YR8/3 浅黄橙	密 1.0(0.5) 赤、石	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、オサエ、ナデ	硬	K1/4	
4	5	SD021 3 層	須恵器	坏 B	-	(2.2)	[10.2]	内外面：N7/0 灰白 断面：N7/0 灰白	密 2.0（0.5）長、石、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台	硬	T1/6	
5	4	SD021 SE 除去	須恵器	蓋	[17.0]	2.2	-	内外面：N7/0 灰白 断面：N7/0 灰白	密 0.5(0.5) 長、石	ロクロナデ	つまみ部貼付けナデ、回転ケズリ、ロクロナデ	硬	K1/12 つまみ部 1/1	重ね焼き痕
6	8	SD021 2 層	緑釉陶器	皿	[13.0]	3.0	[7.0]	内外面：明緑 断面：2.5YR8/1 灰白	密 2.0（0.5）長、石、チ	施釉	施釉、貼付高台	硬	K1/4、T1/3	
7	9	SD021 最上層	緑釉陶器	椀か	-	(1.7)	[7.3]	内外面：2.5GY8/1 灰白 断面：5Y8/1 灰白	密 1.0(0.5) 長、石、チ	施釉	施釉	硬	T1/3	
8	10	SD021 畔深堀	灰釉陶器	椀	-	(3.0)	[7.5]	内外（釉）：7.5Y7/2 灰白 内外（胎）：5Y8/1 灰白 断面：5Y8/1 灰白	密 0.5(0.5) 長、石、チ	施釉、ナデ	ロクロナデ、貼付高台、糸切り	硬	T1/1	
9	TH-1	SD021 最上層	瓦	軒平瓦	長さ (7.6)	幅 (8.0)	瓦当厚 (6.7)	凹凸面：N7/0 灰白 断面：N7/0 灰白	密 3.0（1.0）チ、長、石	凹面：ナデ	凸面：ケズリ	硬	-	
12	6	SD021 畔深堀	瓦器	椀	[15.0]	(4.0)	-	内外面：N4/0 灰 断面：N8/0 灰白	密 0.5（0.5）長	ヨコナデのちミガキ、ミガキ	ヨコナデのちミガキ、ミガキ	硬	K1/12	
13	7	SD021 最上層	瓦器	椀	[15.0]	(4.0)	-	内外面：N3/0 暗灰 断面：N8/0 灰白	密 0.5(0.3) 長、石	ヨコナデのちミガキ、ミガキ	ヨコナデのちミガキ、ミガキ	硬	K1/6	

〔凡例〕
法量は、[ ] が復元値、( ) が残存値を示す。
粒土は、最大粒度を示し、( ) 内には普遍的なもののうちで大形粒度長を示した。
鉱物の表記は、それぞれ石：石英、チ：チャート、雲：黒雲母、赤：赤色斑粒、黒：黒色粒として示し、原則として量の多いもの順に表記した。
残存度は、原則的には、口縁部の残存度を示した。

第３章　長岡京跡右京第1153次調査（７ANSSR-８地区）報告

第１節　はじめに

調査地　　大山崎町字円明寺小字里ノ後19ほか

所収遺跡　長岡京跡・久保川遺跡

条　坊　　右京九条三坊十二町

調査期間　平成29年１月30日～３月31日

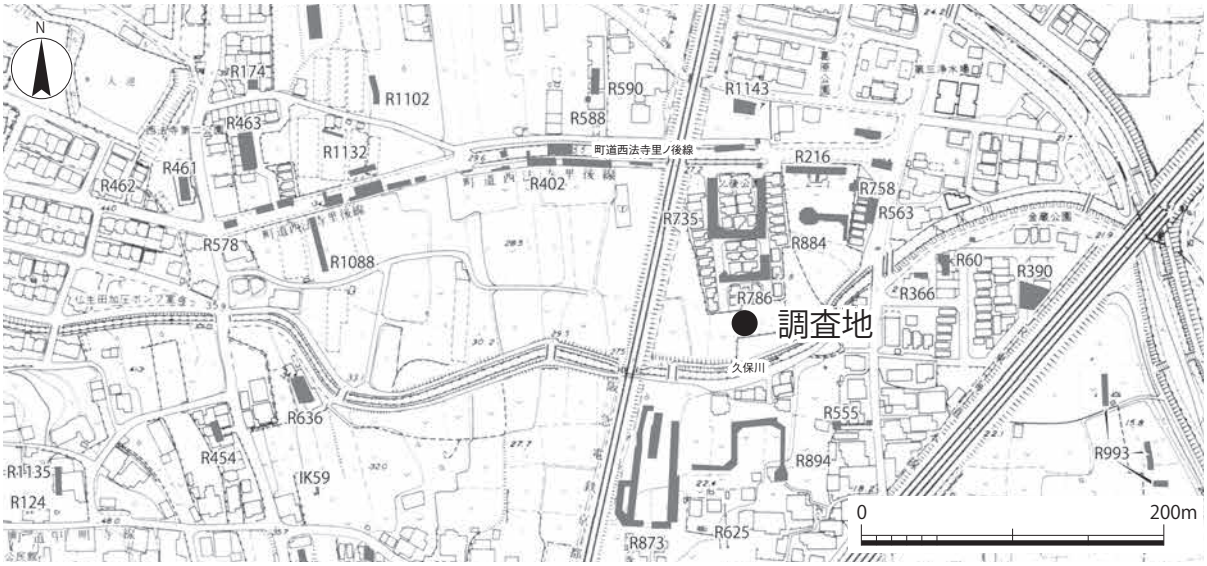
調査面積　193㎡

第２節　歴史的景観と位置

調査地は、標高約23mの扇状地に位置する。現状は水田であるが、宅地開発に伴い発掘調査を実施した。調査地南側約20mには久保川が流れる。調査地の北西側約250m地点で久保川が小泉川に合流する。

周辺では多くの調査が行われている。調査地北側で行われたR735次調査（大山崎町教委2006）、R786次調査（大山崎町教委2006）、R884 次調査（大山崎町教委2007）では、奈良時代の州浜が検出され、庭園遺構と考えられる。久保川を挟んで南側で行われたR873次調査（大山崎町教委2008）、R894次調査（大山崎町教委2008）では、奈良時代の遺物が多く出土した。中でも、「大宅」や「麻呂」といった墨書土器の出土は特筆される。

町道「西法寺里ノ後線」敷設に伴って行われたR402次調査（大山崎町教委1994）では、中世の遺構面の下層から流路を検出した。また、R402次調査の周辺で行われたR216次調査やR1143次調査（大山崎町教委2017a）では、中世の遺構面を検出した。R463次調査、R1102次調査（大山崎町教委2017c）やR1132次調査（大山崎町教委2017b）では、流路を検出した。特にR463次調査では、流路から古墳時代の遺物が出土した。



第 21 図　調査地位置図（1/5,000）

第３節　調査経過

調査は、１月30日から３月31日まで実施した。経過は下記の通りである。

１月30日　　調査準備を行う。

１月31日　　重機掘削を行う。３層上面まで重機掘削を行う。

２月１日～　人力掘削を行う。

２月22日　　第３調査区の全景写真を撮影する。

２月28日　　第３調査区を埋め戻す。第１調査区と第２調査区の間をつなげる（註１）。第４調査区を拡張する。

２月29日～　遺構検出をする。

３月28日～　全景写真、遺構の部分写真を撮影する。

３月31日　　現地を撤収する。

第４節　基本層序

基本層序は、１～４層に分けられる。

１層は、現代の水田である。１a層は黒褐色粘土である。１b層は緑灰色シルト層であり、水田の床土と考えられる。

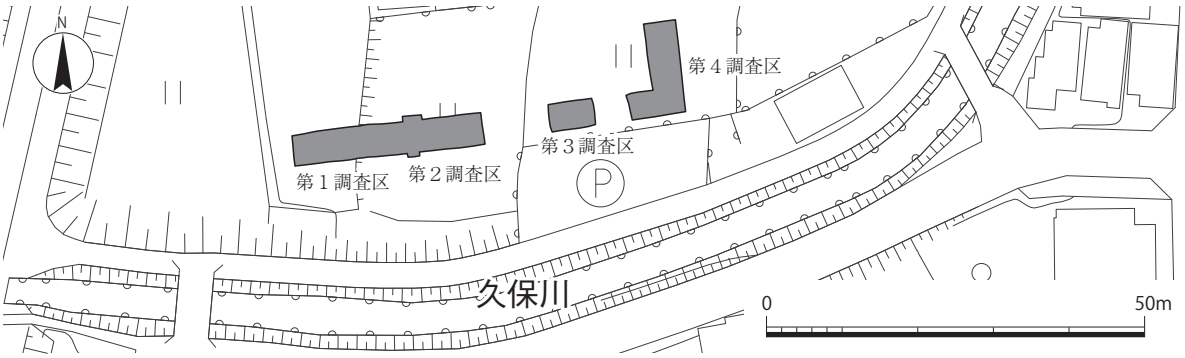
２層は、緑灰色から暗灰色の粘質土およびシルト層である。非常に希薄であるが、中世の遺物が出土する。１～２層の堆積状況から中世から現代にかけて水田であったと考えられる。

３層上面で第１遺構面を検出した。

３層は、茶褐色から黒褐色のシルトおよび粘質土層である。当調査区の中では比較的安定した層である。古代の遺物を多く含む遺物包含層である。第１調査区は第１遺構面で遺構が検出されたことから、３層の残存状況が比較的良好である。一方、第２調査区、第３調査区、第４調査区では３層がほとんど依存しない。これは、本来水平に堆積した３層を２層の水田造成に伴って切り土したと考えられる。

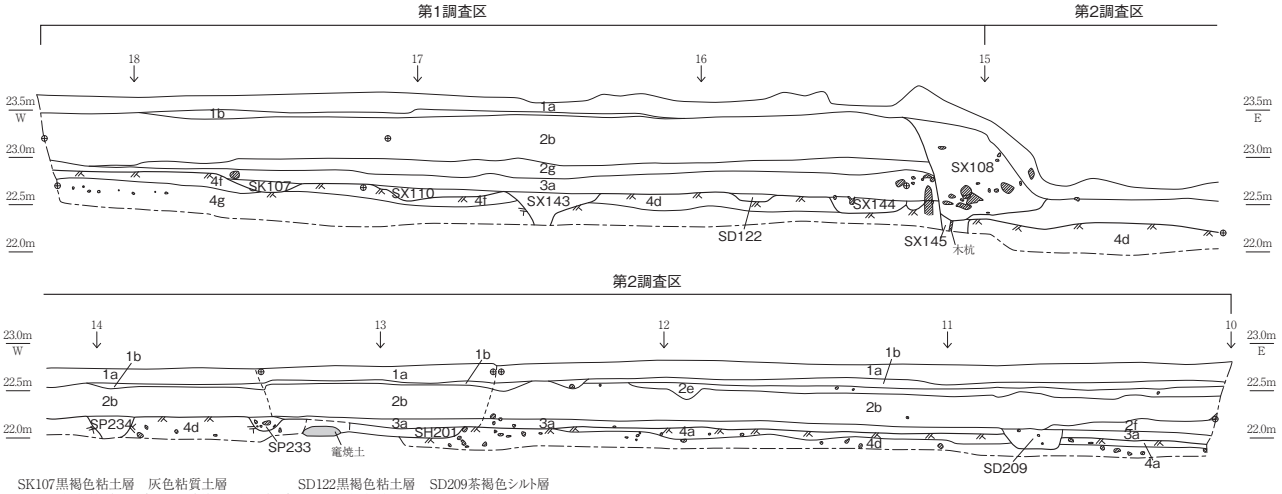
４層上面で第２遺構面を検出した。第１調査区から第４調査区で検出した遺構は出土遺物の年代が平城宮出土土器編年Ⅲであることから同一面と考えられる。

４層は、地盤層である。遺物は含まない。シルトあるいは粘質土である。



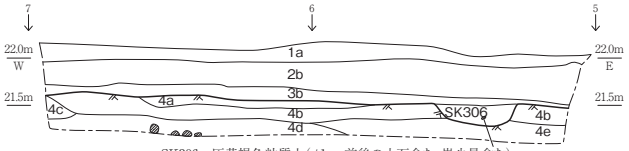
第 22 図　調査地位置図（1/1,000）

第1調査区、第2調査区北壁断面図



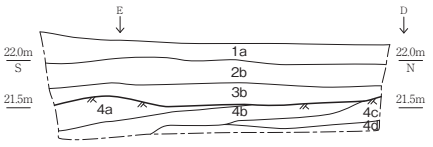
SK107黒褐色粘土層　灰色粘質土層
　　褐色粘質土層(φ2mm前後の砂粒を含む)
SX108淡灰色黒色ブロック混じり粘土層
SX110黒褐色粘土層
SD122黒褐色粘土層　SD209茶褐色シルト層
SX143黒褐色粘土層　SP233茶褐色シルト層
SX144黒褐色粘土層　SP234暗茶褐色粘質土層
SX145暗灰色粘土層

第3調査区北壁断面図

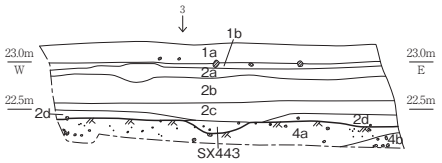


SK306　灰黄褐色粘質土(φ1cm前後の小石含む。炭少量含む)

第3調査区西壁断面図

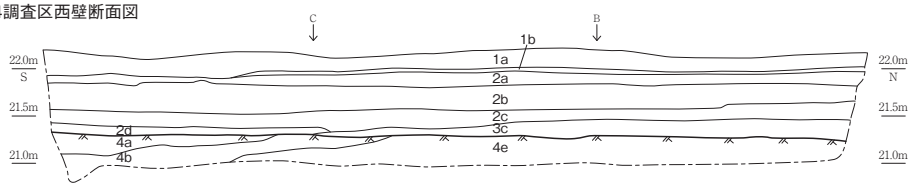


第4調査区北壁断面図



SX443　茶褐色シルト層

第4調査区西壁断面図



【基本層序】

1a 灰色粘土層　水田の天土
1b 緑灰色シルト層(褐色粘質土含む)　水田の床土
2a 淡緑灰色シルト層
2b 緑灰色シルト層(トレンチ東半では褐色シルト多く混じる)
2c 暗灰黄色シルト層(灰色シルト含む)
2d 暗灰色粘土層
2e 明褐色粘質土層(φ2～3cmの小石、細砂含む)
2f 暗灰黄色粘質土層(黒褐色粘質土粒含む)
2g 明褐色シルト層(マンガン粒含む、炭・焼土少量含む)
3a 茶褐色シルト層
3b 褐色粘質土層(φ1～3cmの小石含む、遺物多く含む)
3c 黒褐色礫混じり土層(φ1cm前後の小石多く含む)

4a 緑灰色粘質土(φ5mm前後の砂粒、φ3～8cmの礫含む)
4b 黒色粘土層(φ5mm前後の砂粒含む)
4c 暗灰色粘土層
4d 緑灰色シルト層
4e 灰色粘土層(φ3～8cmの礫多く含む)
4f 灰色シルト層(暗褐色粘質土含む、φ2cm前後の小石少量含む)
4g 明灰色シルト層(φ2mm前後の砂粒多く含む)
　地山

第 23 図　調査区壁断面図（1/80）

第５節　検出遺構

２面の遺構面を確認した。上から第１遺構面（３層上面）、第２遺構面（４層上面）とする。出土した遺物から第１遺構面は中世（12～13世紀）、第２遺構面は奈良時代（平城宮出土土器編年Ⅲ）に比定される。なお、第１遺構面は、第１調査区でのみ確認した。第２調査区、第３調査区、第４調査区では削平を受けていると考えられる。

１　第１遺構面

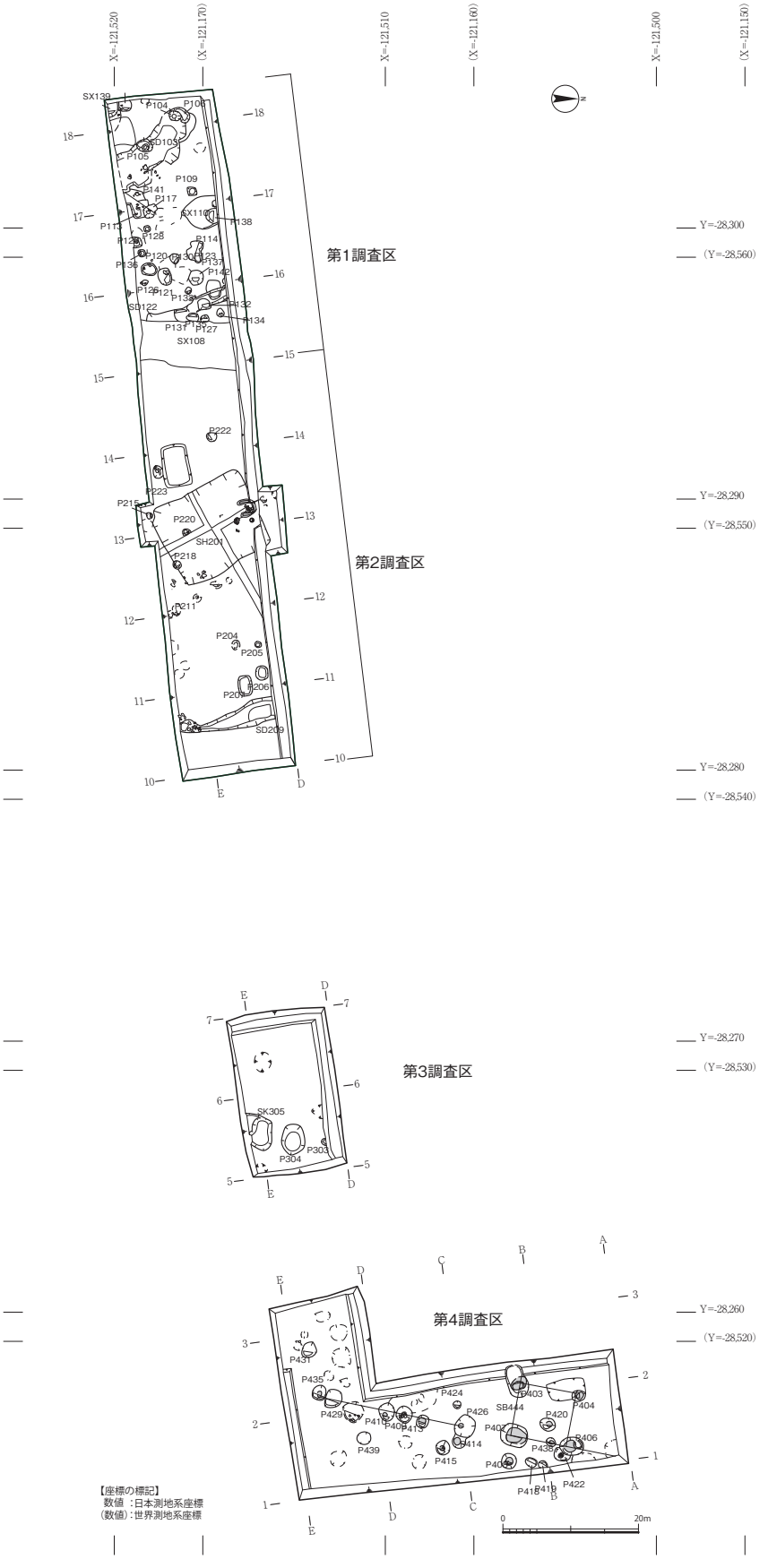
石積遺構SX108　長４m以上、幅約60㎝、残存高約50㎝の石積遺構である。30㎝ほどの大きな石の間に小石を充填させ、石と石が組み合うように積む。石垣のような様相を呈し、土留めの機能が考えられる。また、不規則に６本の丸杭が打たれる。堀方が存在しないため、上方から打ち込むことによって安定させたと考えられる。これら木杭は石積みを安定させる機能が考えられる。石積遺構SX108の下層に木杭が存在する。堀方は存在せず、上方から打ち込まれたと考えられる。軟弱な地盤であるため、石積の接地面の硬化の機能が考えられる。あるいは、異なる遺構の可能性も考えられる。

溝SD101　幅約30㎝の溝である。地形条件に基づいて西から東への水の流れが想定される。

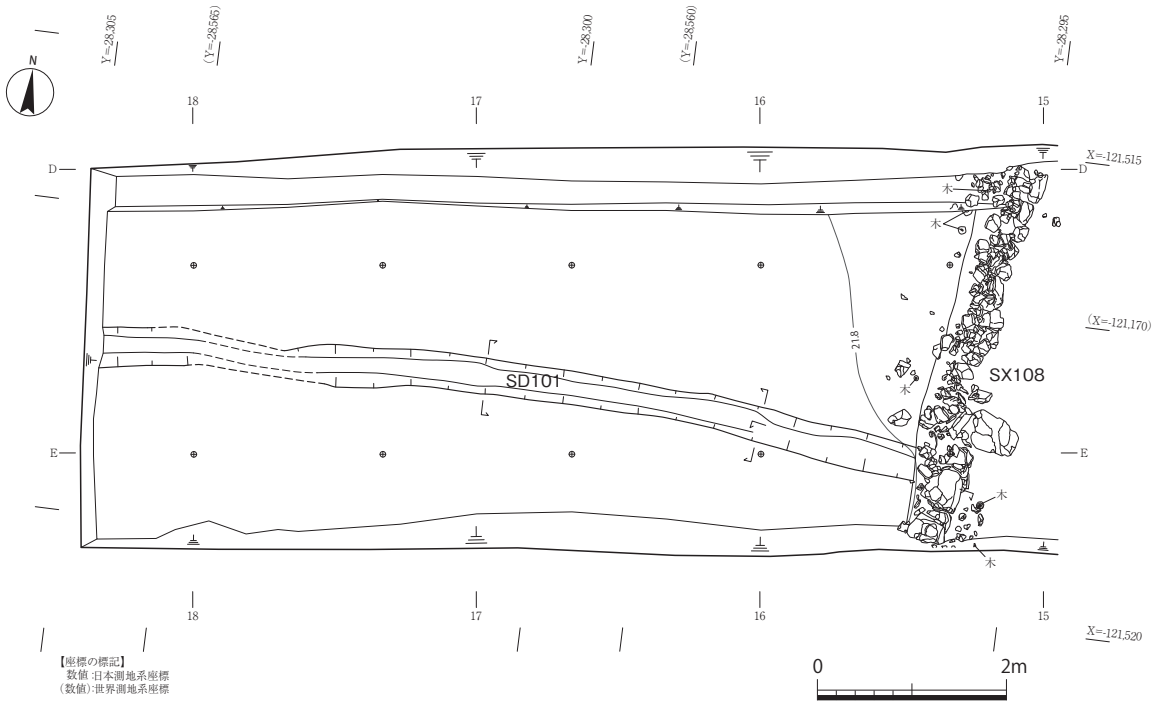
２　第２遺構面

竪穴建物SH201　第２調査区13E区で検出した竪穴建物である。東西約3.2m、南北約3.7m、深さ約0.2mである。隅丸方形を呈する。方位はN29°Wを測る。北側に竈が所在する。逆U字形を呈し、粘土を土堤状に盛り上げて構築する。火を受けたため、表面は赤褐色である。貼床や周壁溝は存在しない。主柱穴は、ピットP203、ピットP228、ピットP229、ピットP231の４基を検出した。径15～28㎝、深さ約10㎝である。床面からは奈良時代（平城宮出土土器編年Ⅲ期）の土師器や須恵器が出土した。特に竈周辺には甕が集中して出土した。少なくとも11個体を数える。

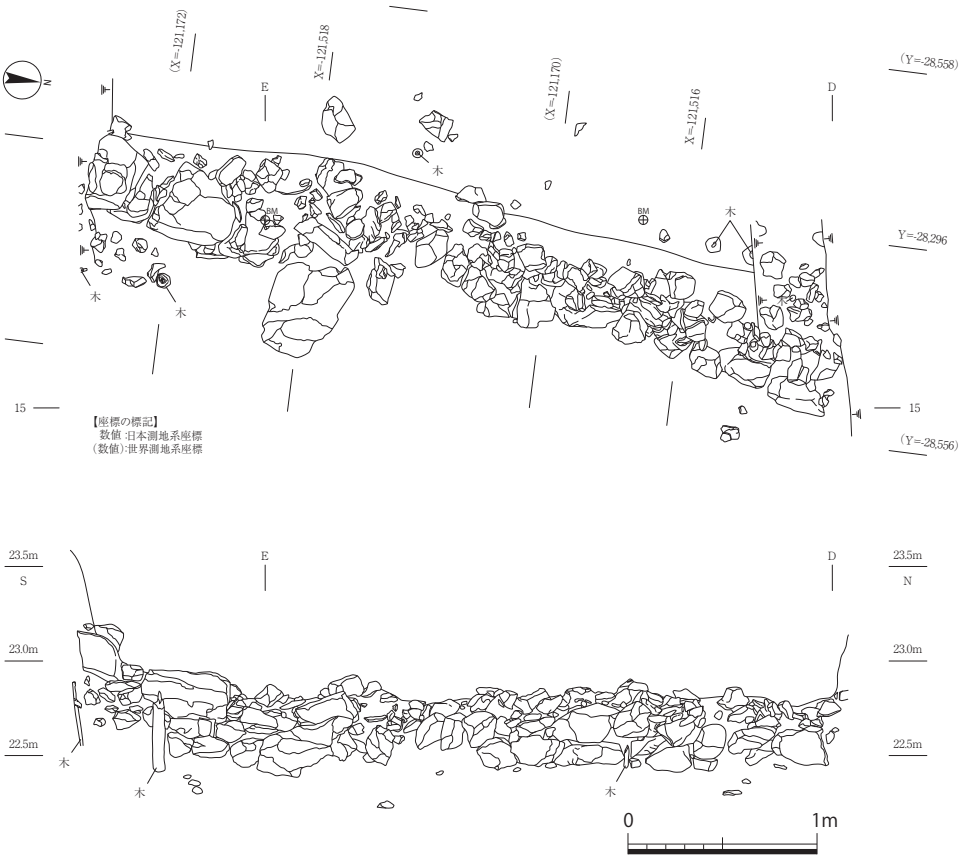
掘立柱建物SB444　第４調査区１B区で検出した掘立柱建物である。東西１間以上、南北１間以上である。柱間は、約1.4mである。方位は、N77°５′Wを測る。柱穴はピットP403、ピットP407、ピットP406で構成される。これらは不整形な楕円形を呈する。主柱穴の断面が不整形であることから、柱の抜き取りが考えられる。径約50～70㎝、深さ約30㎝である。主柱穴の抜き取り跡の埋土には、焼土や炭化物が多く含まれる。建物の火災の可能性が考えられる。掘立柱建物SB444の周囲に平面的な炭化物や焼土の広がりが確認されないが、削平を受けていると考えられる。ピットP422はピットP406に近接していることから立替の可能性がある。切り合い関係にはないため、先後関係は不明であるがピットP404は、掘立柱建物SB444の内部の柱と考えられる。掘立柱建物SB444を構成するピットP406、ピットP403からの柱間は1.4mである。一方、掘立柱建物SB444を構成するピットは、柱の抜き取りが行われているが、ピットP404は柱の抜き取りが行われていない。ピットP404 の径約30㎝、深さ約20㎝であり、掘立柱建物SB444を構成するピットと比べ小さい。また、主柱穴の抜き取り跡の埋土には焼土や炭化物を含まない。以上の相違点から、ピットP404は掘立柱建物SB444の建物内部の柱であると考えられる。また、ピットP438、ピットP420、ピットP408は主柱穴をもつピットであり、掘立柱建物SB44 に近接することから建物構造に関する柱跡の可能性も考えられる。



第 24 図　調査区全体平面図（1/250）



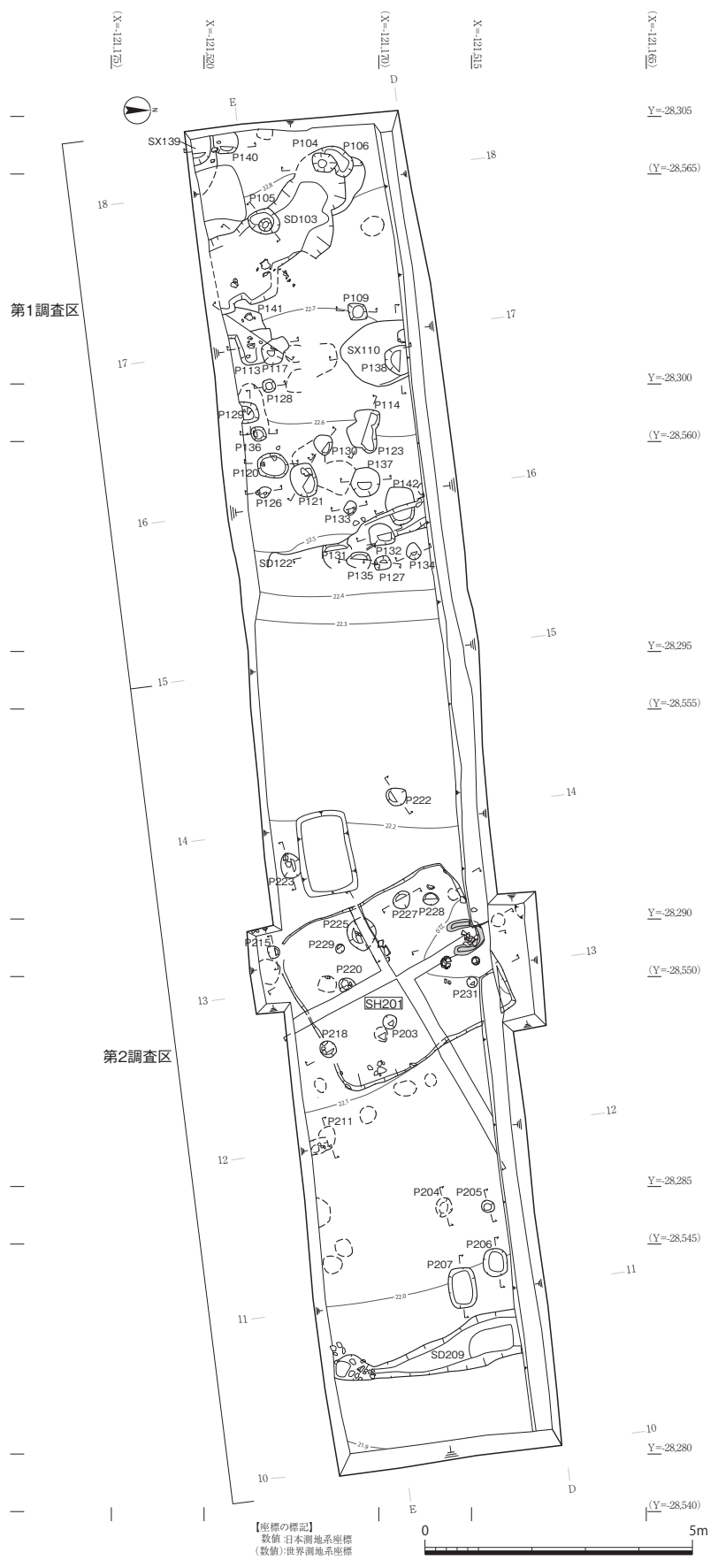
第 25 図　第 1 調査区第 1 遺構面平面図（1/80）



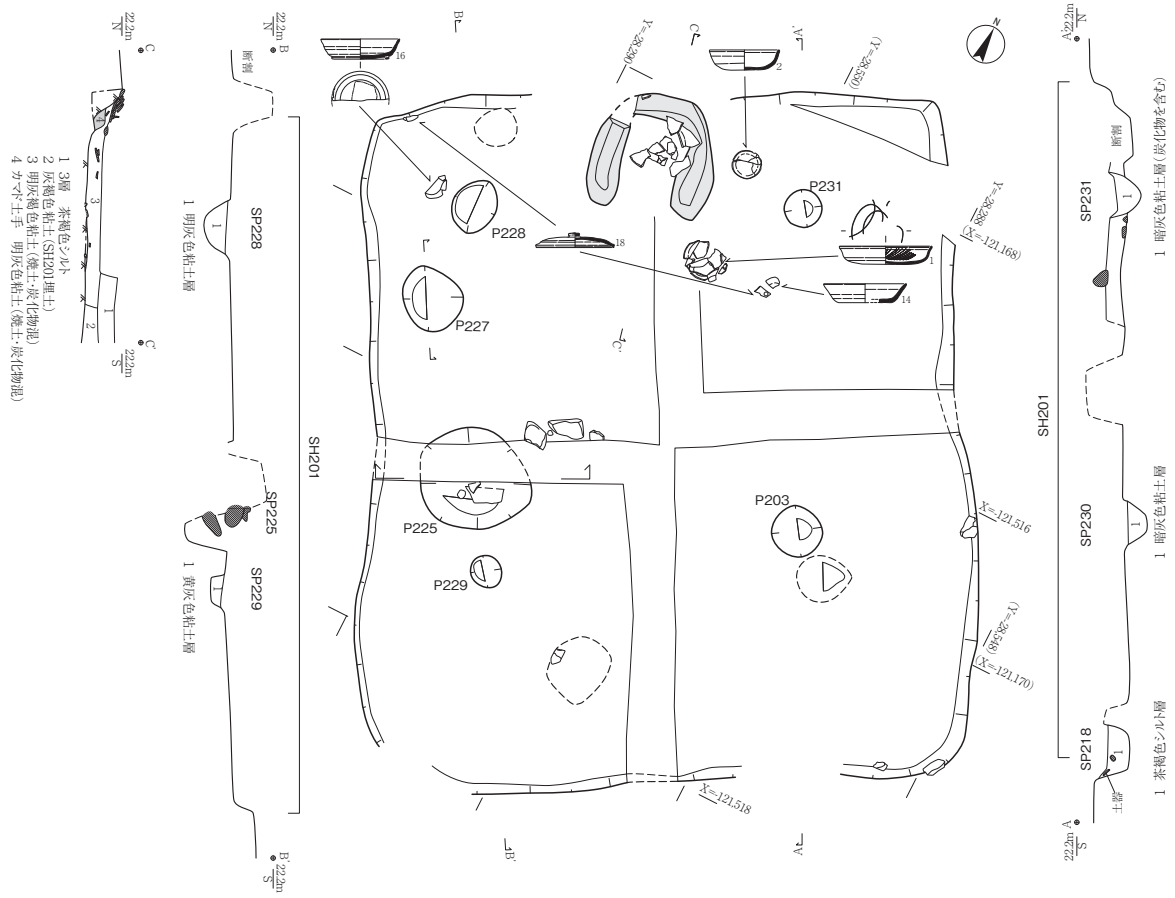
第 26 図　SX108 平面図、立面図（1/40）

柵列SA445　第４調査区１Ｃ区、１Ｄ区で検出した柵列である。５個の主柱穴を伴うピット（ピットP426、ピットP413、ピットP409、ピットP410、ピットP435）と主柱穴は明確でないピットP429から構成される。掘立柱建物SB444の東ラインの延長線上にあたるため、掘立柱建物SB444と関わる柵列と考えられる。

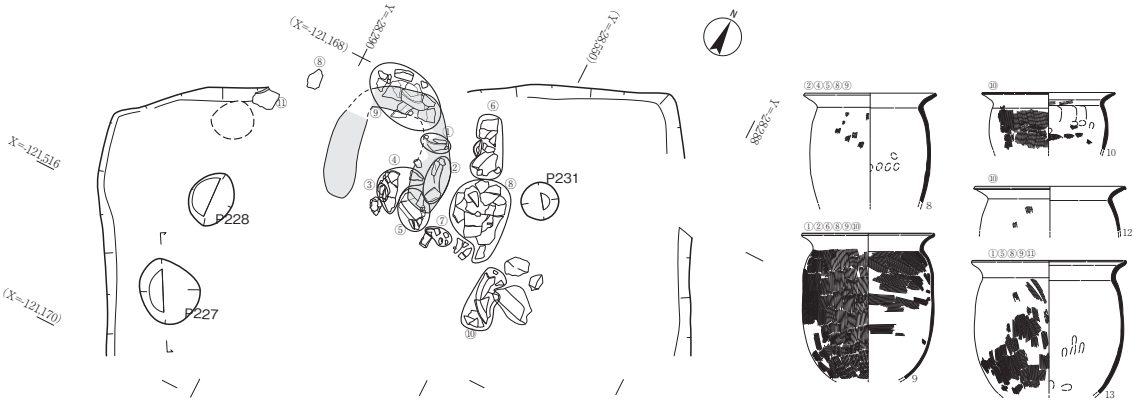
その他の遺構　その他にピットや溝等を検出した。特に包含層の残存状況の良好な第１調査区で多くの遺構を検出した。本来は、第２調査区、第３調査区、第４調査区でも多くの遺構が存在していたが、削平により痕跡が失われたと想定される。掘削深度の深い竪穴建物や掘立柱建物などを調査で検出したものと考えられる。



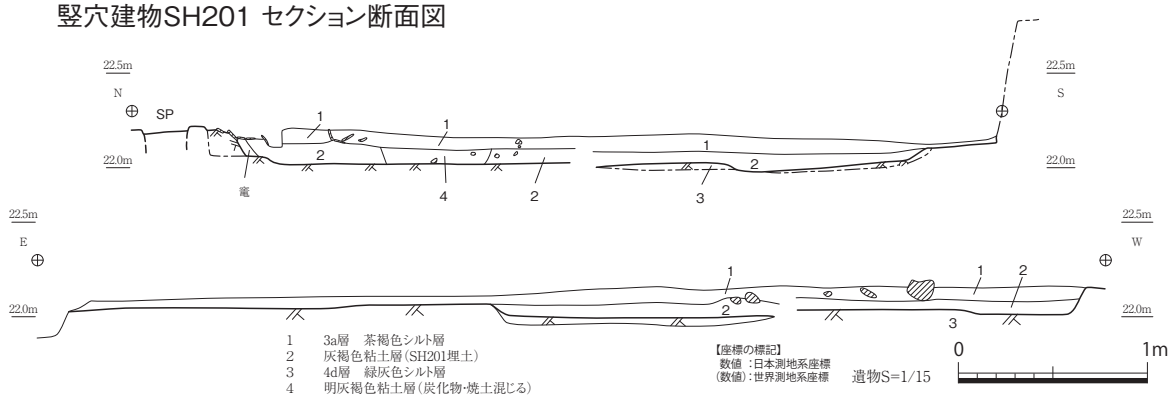
第 27 図　第１調査区、第２調査区第２遺構面平面図（1/125）



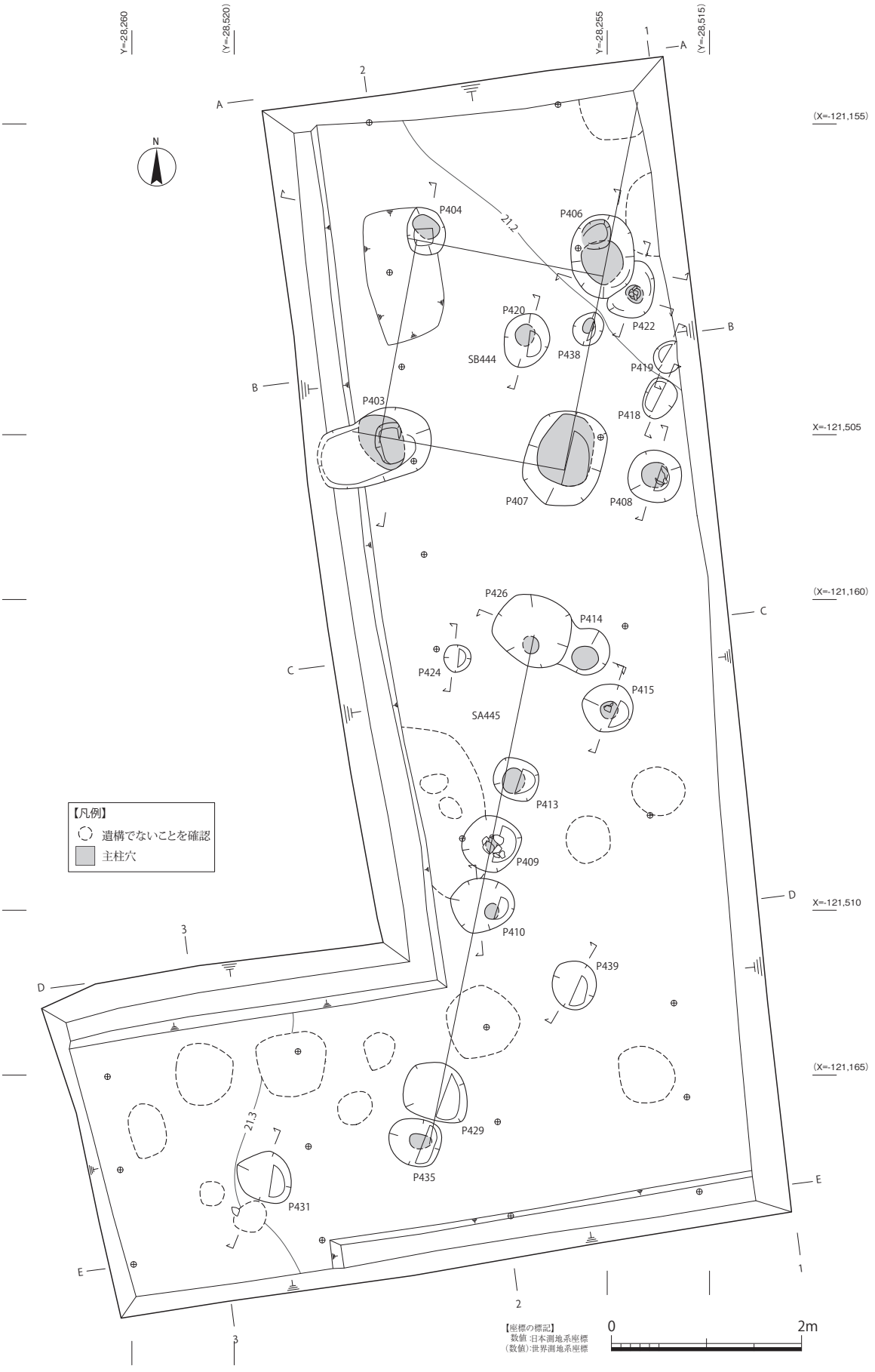
竪穴建物SH201 甕出土状況図



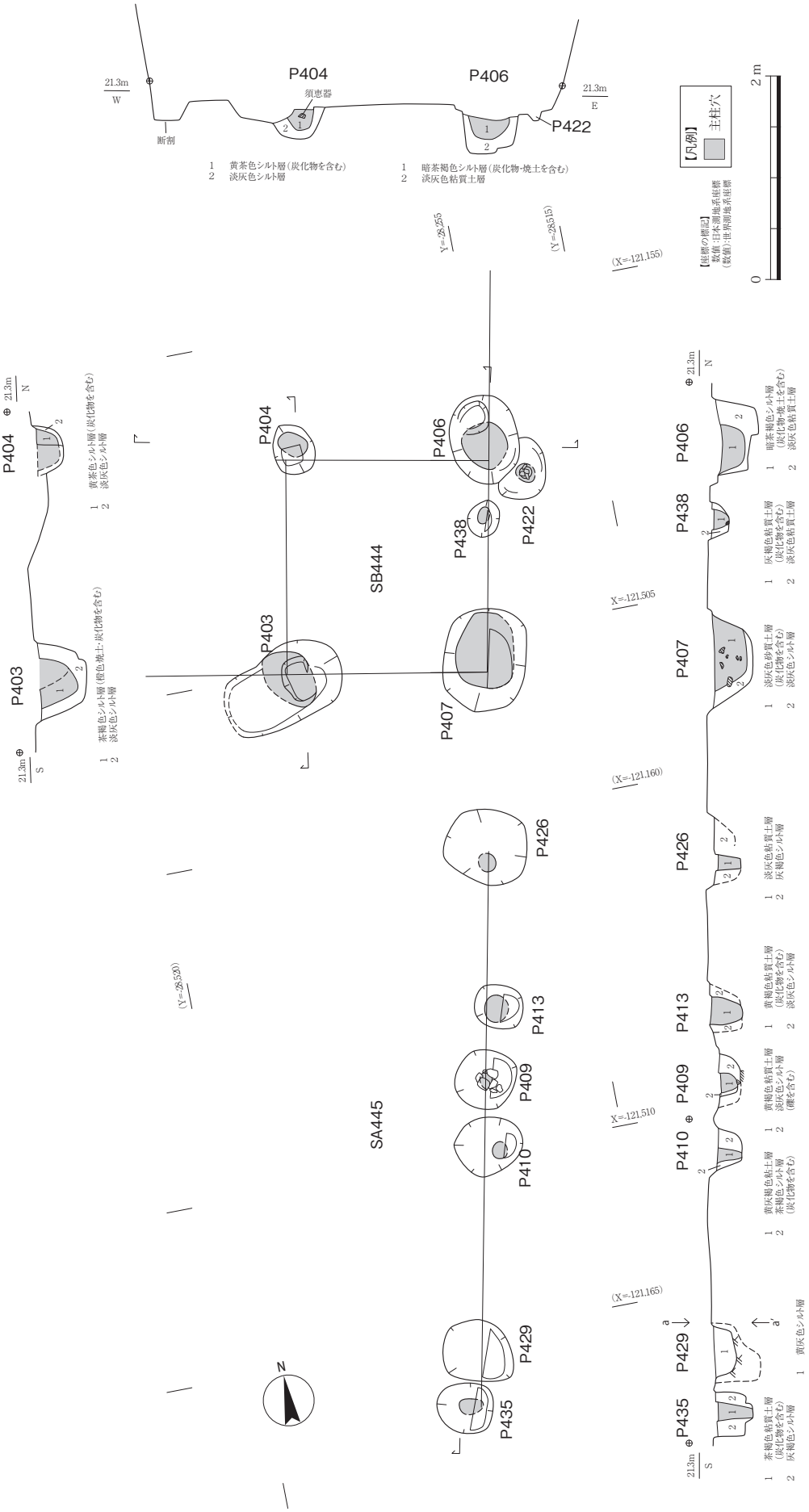
竪穴建物SH201 セクション断面図



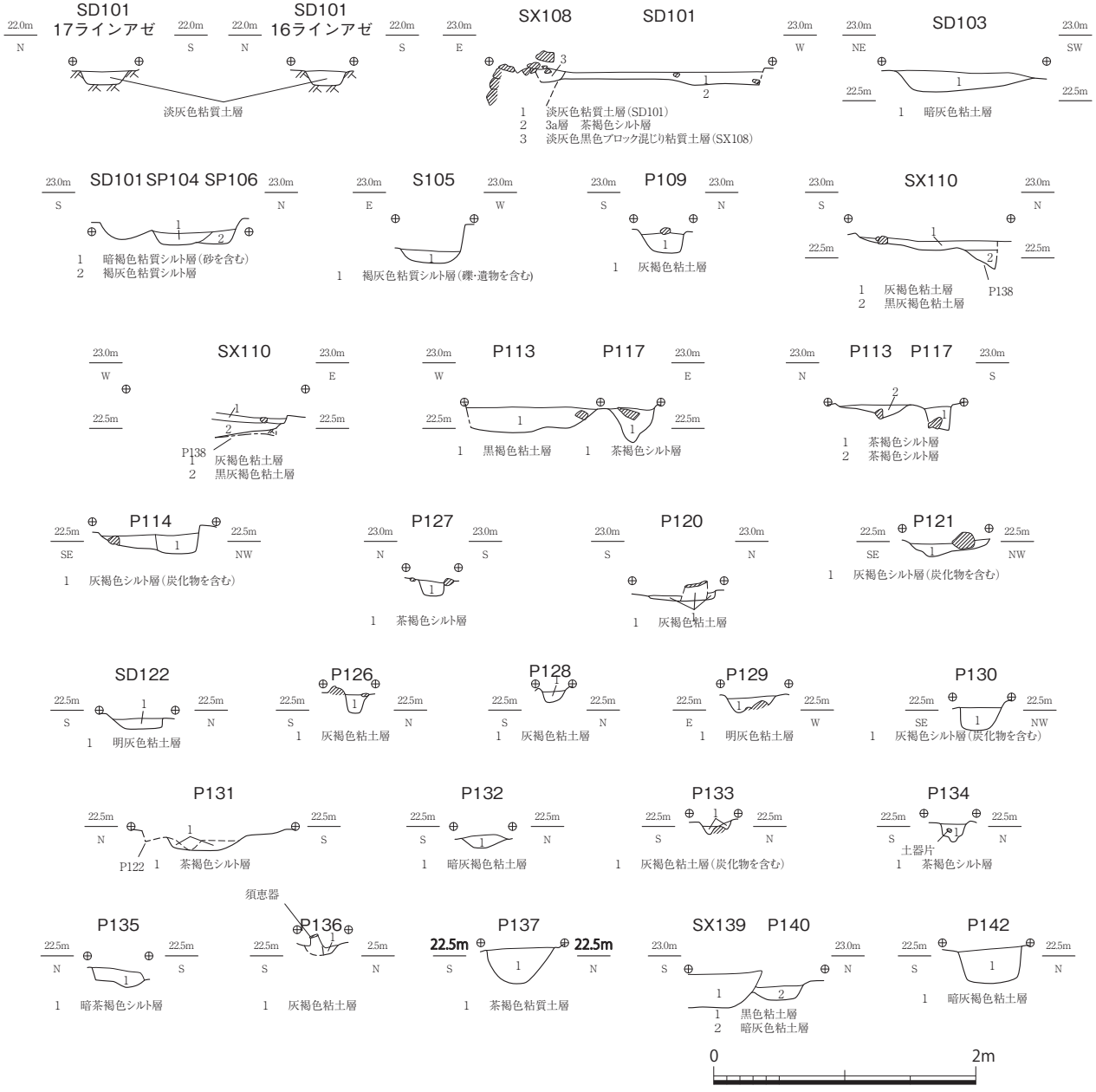
第 28 図　竪穴建物 SH201 平面図、断面図（1/40）



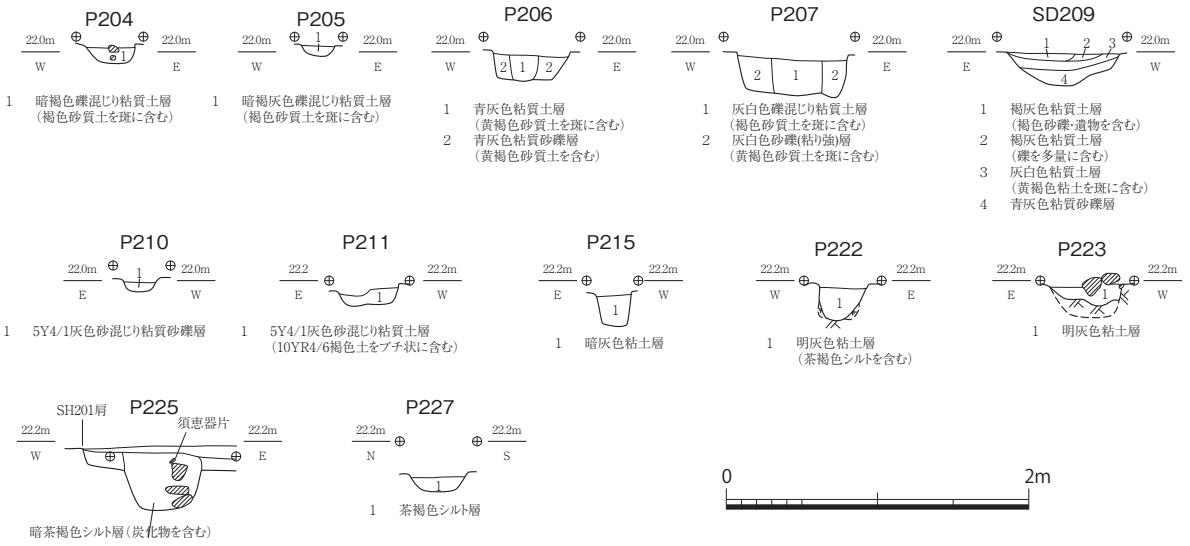
第 29 図　第 4 調査区遺構平面図（1/60）



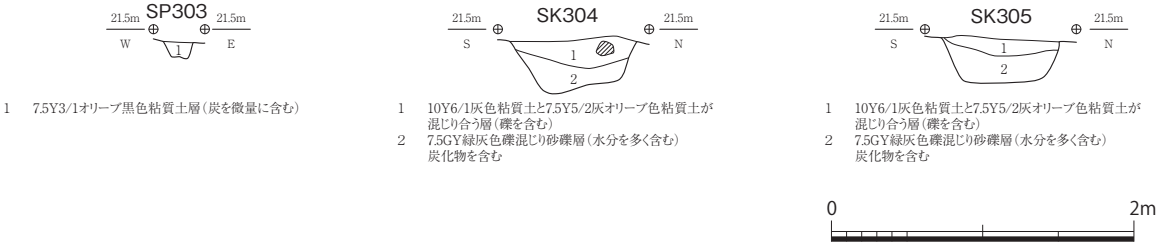
第 30 図　掘立柱建物 SB444 と柵列 SA445 の平面図、断面図（1/60）



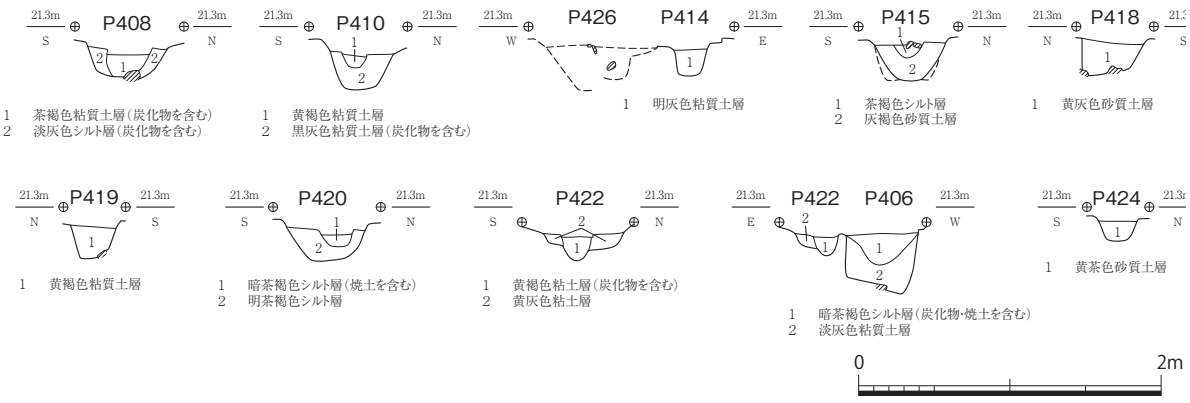
第 31 図　第 1 調査区遺構平面図（1/50）



第 32 図　第 2 調査区遺構断面図（1/50）



第 33 図　第 3 調査区遺構断面図（1/50）



第 34 図　第 4 調査区遺構平面図（1/50）

第６節　出土遺物

全体でコンテナ６箱分の遺物が出土した。取り上げには、南北方向には北からアルファベットでAから順に、東西方向には東からアラビア数字で１から順に３ｍごとのグリット（第24図）を設けた。第２遺構面に位置する遺構及び、３層からは古代（奈良時代～平安時代）の遺物が出土した。第１遺構面に位置する遺構及び、２層からは中世（12～13）の遺物が出土した。

１　奈良時代の遺物

竪穴建物SH201　土師器、須恵器、製塩土器が出土した。特に、カマド周辺から土師器甕がまとまって出土した。口縁端部の出土数から少なくとも11個体を数える。これら土師器、須恵器は平城宮出土土器編年Ⅲ（註２）であり、中でも新段階（奈良国立文化財研究所1995）に比定されると考えられる。土師器、須恵器の形態や法量の区分に関しては、『平城宮発掘調査報告』Ⅵ（註３）に準ずる。

土師器は、杯（１）、椀（２）、甕（３～13）がある。１は、口縁部の形態が底部から2/3あたりで緩やかに外反し、その後やや内湾気味になり端部を巻き込んで終わる。A形態に区分される。法量は口径18.4cm、器高3.7cmであり、区分Ⅲにあたる。口縁部の内面に放射線状に１段の暗文を施す。２は、内外面の調整はユビナデ及びユビオサエである。

いずれの甕も口縁部の形態は、鋭く屈曲して広がる口縁部をもち、口縁端部を上方または上下に拡張して端面をもつ形態である。岩崎氏のE形態であると考えられる（岩崎1996）。口縁部径は約16cmの個体（５、６）と24～31cmの個体（７～13）に分けられる。いずれも全形が把握できる個体がないが、甕の法量を反映していると考えられる。

須恵器は、杯A（14）、杯B（15、16）、杯B蓋（17、18）がある。杯A、杯Bは口縁部径13～16cm、器高3.0～4.0cmである。法量は区分Ⅲにあたり、平城宮出土土器編年Ⅲ新段階の土器では小型にあたることがわかる。15、16の高台の貼付は、屈曲部から７㎜ほど内側に位置する。15の底部外面には墨痕が見られる。17、18は頂部はやや丸みをおび、縁部が屈曲する。B形態に区分される。

製塩土器（19、20）がある。

SD103　土師器、須恵器、製塩土器が出土した。

土師器は、Ⅲ（21）がある。口縁部の形態が底部から2/3あたりで緩やかに外反し、その後やや内湾気味になり端部を巻き込んで終わる。

須恵器はⅢ（22）、蓋（23～27）がある。蓋の口径は、11～20cmとバラツキが見られる。27は、円形のツマミが取り付く。

製塩土器（28）がある。

その他の遺構出土遺物

29はSD209から出土した。**須恵器**の杯Bである。高台の貼付は、屈曲部とほぼ同じ位置に位置する。

30はSD209から出土した。**須恵器**の蓋である。

31はSD209から出土した。**須恵器**の鉢である。

32はSD207から出土した。**須恵器**の蓋である。

33はピットP218から出土した。**須恵器**の杯Aである。

34はピットP225から出土した。**須恵器**の杯Bである。高台の貼付は、屈曲部から６㎜ほど内側に位置する。

35は土坑SK304から出土した。**土師器**の甕である。

３層出土遺物　須恵器、緑釉陶器、瓦が出土した。３層は、第２遺構面の影響で奈良時代の遺物が多く出土したが、平安時代と考えられる遺物も少量出土した。このことから、平安時代にも土地利用が行われていたことが分かる。

須恵器は杯B（36）がある。高台の貼付は、屈曲部とほぼ同じ位置に位置する。

緑釉陶器は椀（37、38）がある。37は、貼付高台である。38は、削り出し高台である。

瓦（39）がある。凸面に叩きの痕跡が残る。R1153次調査で瓦の出土はこの個体１点である。

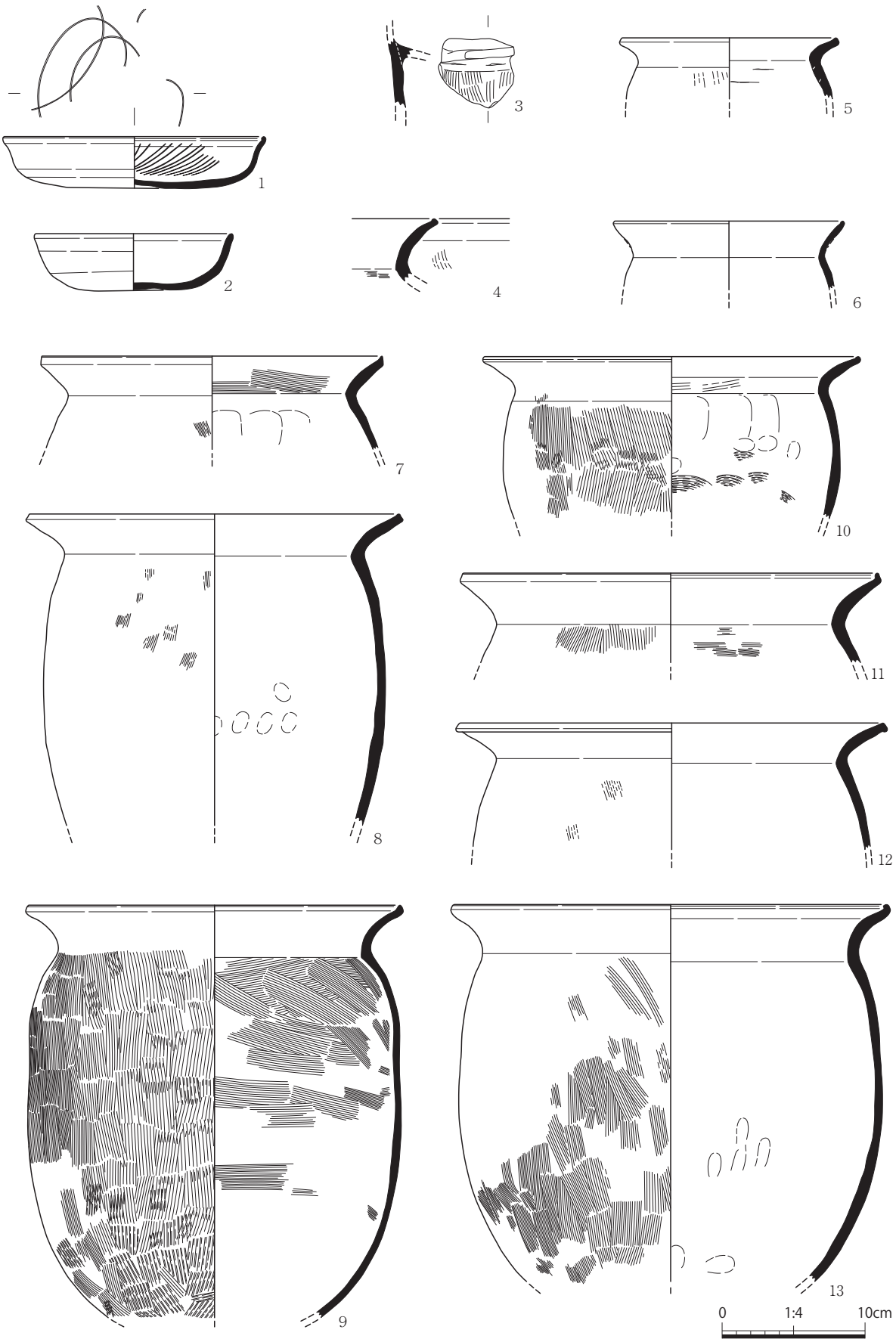
２　中世の遺物

中世の遺物は出土量が少ないため時期を確定することはできないが、おおよそ12～13世紀に比定される。

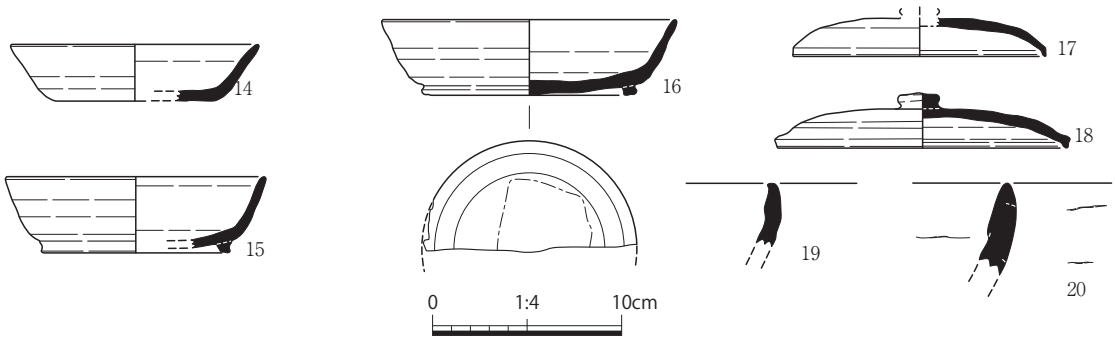
40は、**土師器**の皿である。２層から出土した。口縁部は外反し、口縁端部を丸くおさめる。口径9.8㎝、器高1.4㎝の小型の皿である。

41は、**瓦器**の椀である。溝SD101から出土した。突出の少ない貼付高台をもつ。当該地は楠葉型が出土することから、この個体も楠葉型であると考えられる。

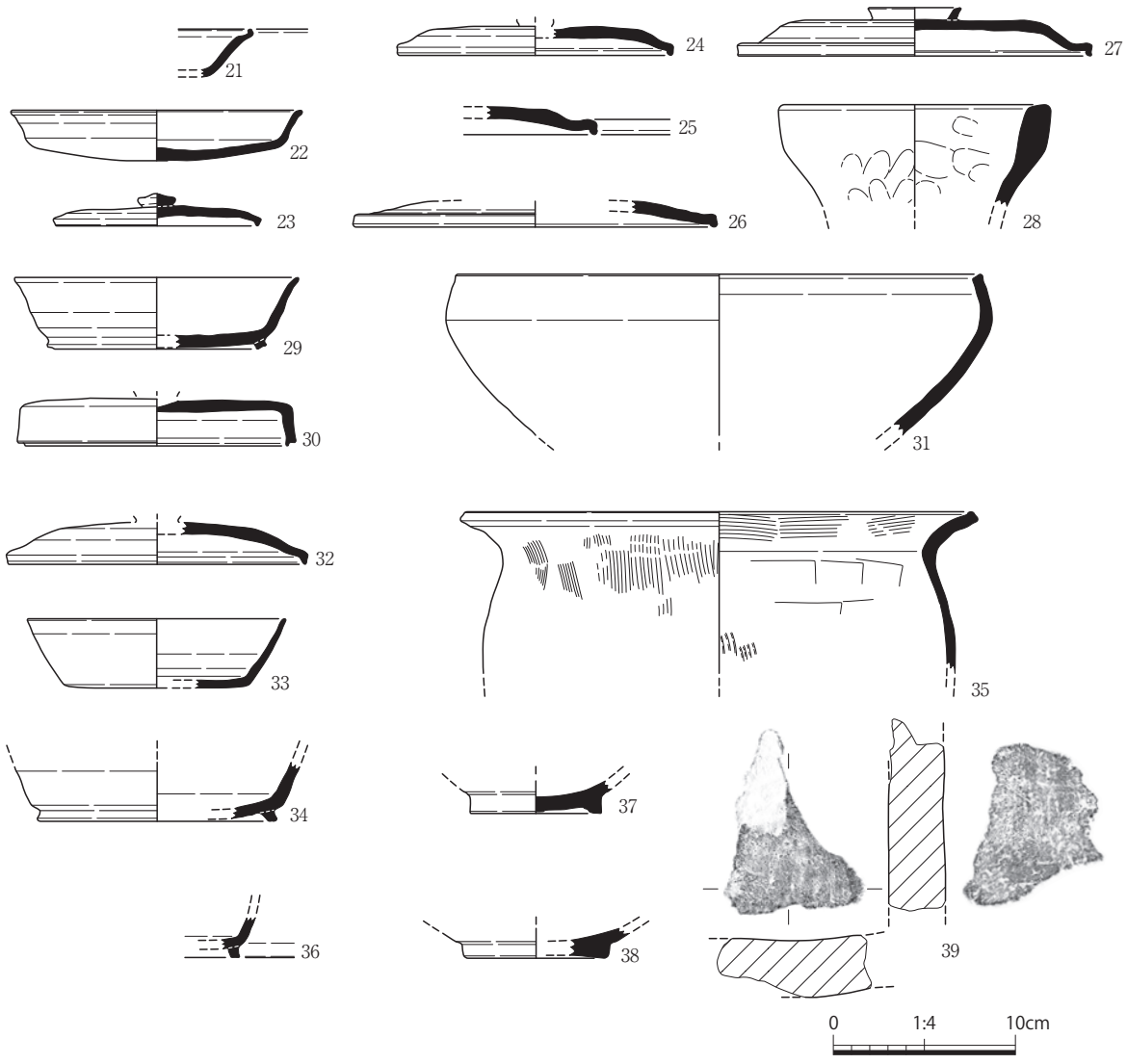
42は、**須恵器**の杯Aである。２b層から出土した。口縁部と底部の境が曖昧となっているが、底部の高台を整形した痕跡を留める。森田氏のⅡ期１段階（12世紀中葉～後半）に比定される。



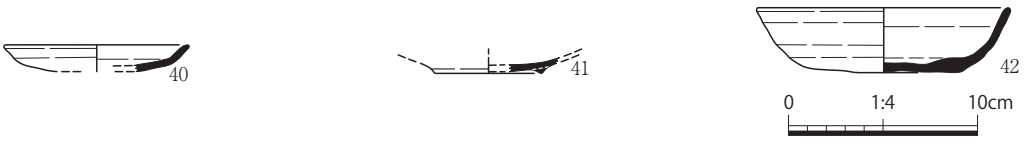
第 35 図　竪穴建物 SH201 出土遺物



第 36 図　竪穴建物 SH201 出土遺物



第 37 図　奈良時代のその他の遺構出土遺物



第 38 図　2 層、溝 SD101 出土遺物

第６節　R216次調査（７ANSSR-２地区）とR463次調査（７ANSSZ-４地区）

R216次調査は、本調査地の北側で行われた調査である。R463次調査は、本調査地の北西で行われた調査である。これらの調査成果は、本調査地を理解する上で不可欠な情報であるため以下に収載する。

R216次調査は、昭和61年１月17日から同年２月25日まで、宅地造成に伴って調査が実施された。調査場所は大山崎町字円明寺小字里ノ後5、6番地にあたる。調査面積は、約230㎡である。

検出遺構　２面の遺構面を検出した。上層の遺構面を第１遺構面、下層の遺構面を第２遺構面とする。上層の遺構面からは南北方向の溝４条（SD4、SD5、SD9、SD12）、東西方向の溝１条（SD10）、土坑SK1、多数のピットを検出した。時期は、中世に比定される。第２遺構面からは、南北方向の溝２条（SD103、SD105）、土坑SK107、掘立柱建物SB104、溝SD101、土坑SK102を検出した。溝SD103、溝SD105、土坑SK107、掘立柱建物SB104は中世の遺構と考えられる。土坑SK102と溝SD101からは古代の遺物が出土した。

出土遺物　コンテナ６箱の遺物が出土した。これらは古代の遺物と中世の遺物に分けられる。

古代　須恵器が出土した。平安時代に比定される。

須恵器は、蓋（１）、椀（２）、甕（３）がある。

中世　土師器と瓦器が出土した。おおよそ13世紀に比定される。

土師器は、皿（４～12）がある。口径が10㎝未満の小型の個体（４～９）と10㎝以上の大型の個体（10～12）に分けられる。10は底部中央が内側に膨らみ、いわゆるヘソ皿化している。８、11は口縁部が直線に外反する。平安京土器編年Ⅶ古期（1270～1300年頃）（註４）に比定される。

瓦器は、皿（13）、椀（14～16）、鍋（17）、三脚羽釜（18）がある。椀は三角形の貼付高台を有する。Ⅲ期（1200～1250年）（近江1995）に比定される。鍋は、口縁部が受け口状を呈する。1200～1300年頃（鋤柄1995）に比定される。

R463次調査は、平成６年２月24日から同年３月31日まで、共同住宅の建設に伴って調査が実施された。調査場所は、大山崎町字円明寺小字西法寺40-５番地にあたる。調査面積は、360㎡である。

検出遺構　流路NR008を検出した。人工的な溝の可能性も否定できない。幅9.8m、深さ30㎝である。流路底のレベル差から西から東への流れである。後述する古墳時代の遺物が出土した。

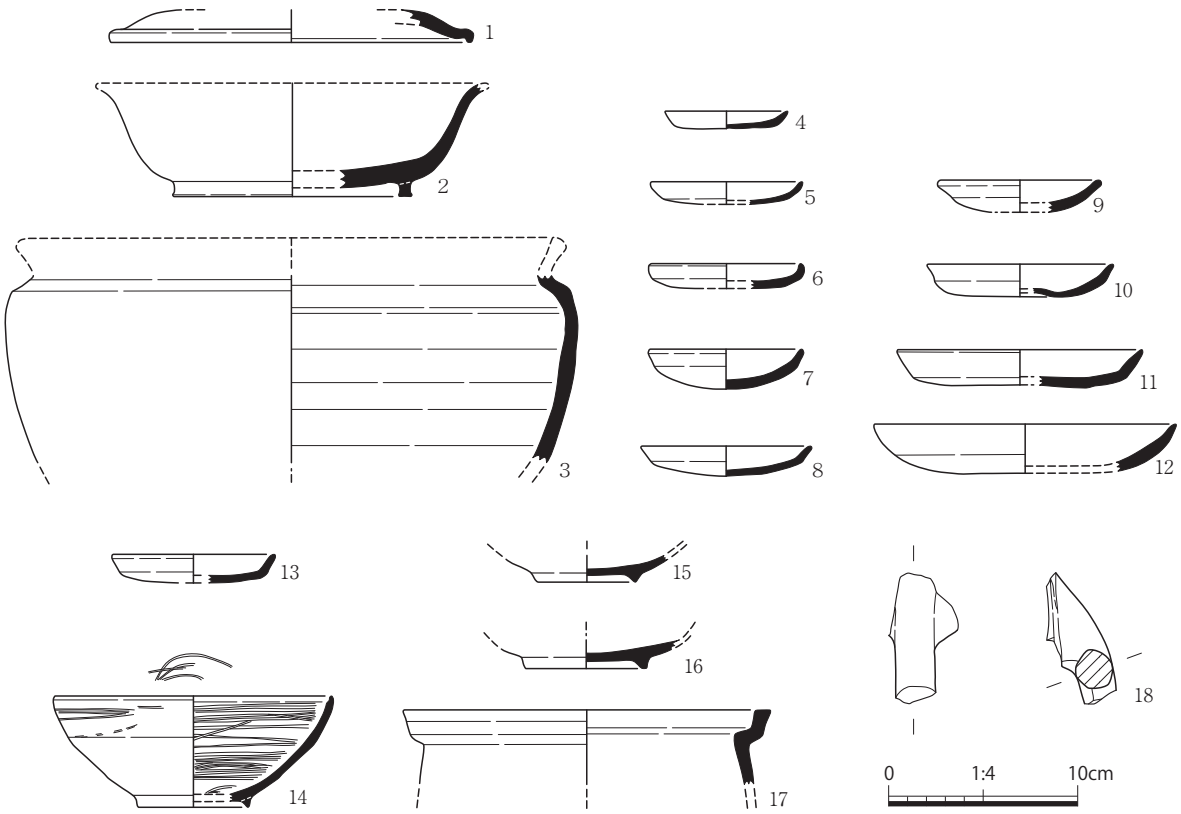
出土遺物　コンテナ２箱の遺物が出土した。流路NR008から出土した遺物を掲載する。土師器は、古墳時代前期に比定され、相対的には布留式期Ⅱ～Ⅲ（米田1991）と考えられる。

１は、土師器の高杯である。

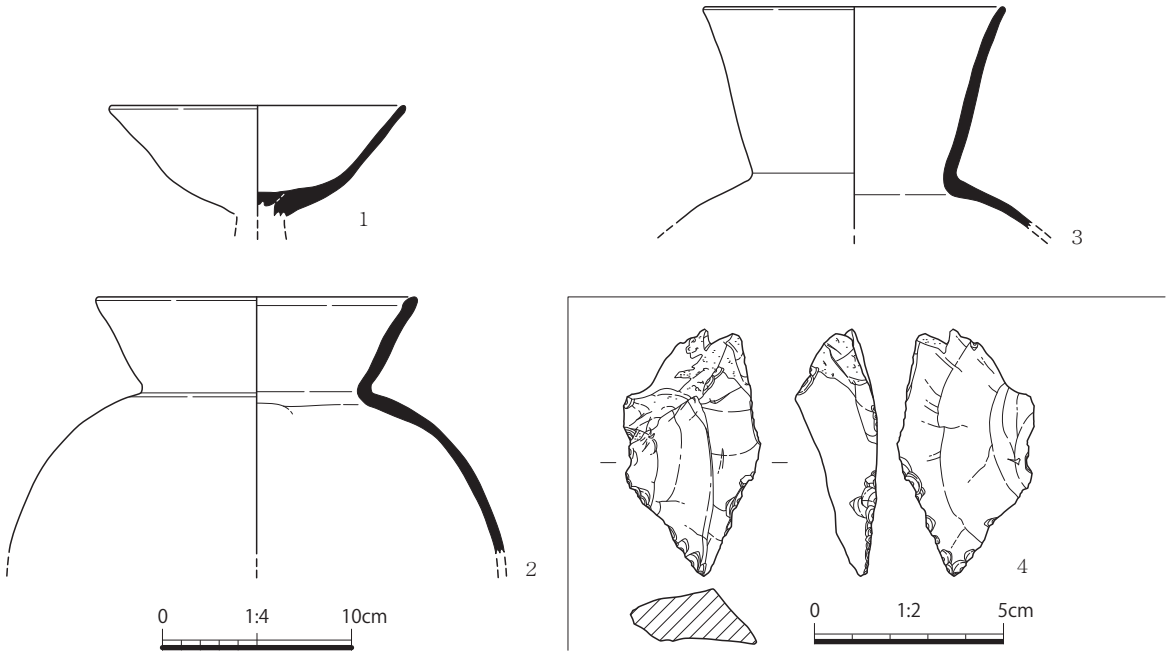
２と３は、土師器の壺である。２は、口縁部に微弱な凹凸が見られる。３は、直口壺である。

４は、石器の剝片である。材質はサヌカイトである。

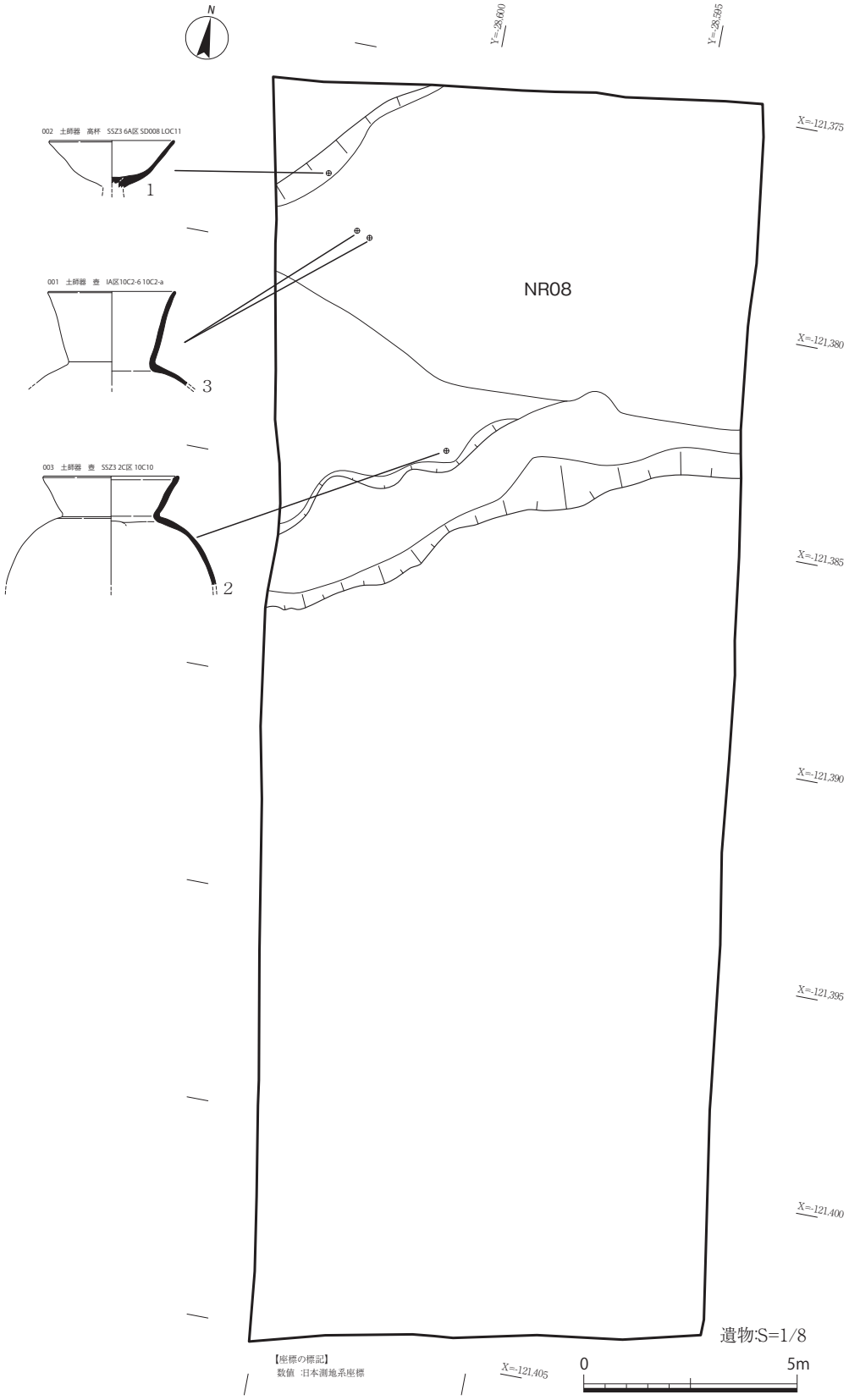
第 39 図　R216 遺構平面図（左図：第 1 遺構面（上層）、右図：第 2 遺構面（下層））（1/200）



第 40 図　R216 次調査出土遺物



第 41 図　R463 次調査出土遺物



第 42 図　R463 遺構平面図（1/150）

第７節　まとめ

１　調査の概要

今回の調査では、２面の遺構面（上層：第１遺構面、下層：第２遺構面）を検出した。第１遺構面は、中世の水田の造成によって削平を受けており、第１調査区にのみ遺存する。

第１遺構面は、中世（12～13世紀）に比定される。石積遺構SX108を検出した。石積遺構SX108を境に東西で水田面に約１mの高低差がある。この石積遺構SX108の上位に現在の水田の畦が築かれている。つまり、石積遺構SX108を検出した地点は、中世から現代まで石積みから畦へと形態を変えながらも東側の水田と西側の水田の境界であったことがうかがえる。

第２遺構面は、奈良時代（平城宮出土土器編年Ⅲ）に比定される。主な遺構は竪穴建物SH201、掘立柱建物SB444、柵列SA445があげられる。

竪穴建物SH201は北側に竈を伴う。東西3.2m、南北3.7mを測る。出土遺物は、土師器、須恵器、製塩土器があり、一般住居の様相を呈する。

柵列SA445は、掘立柱建物SB444の東側南北筋の柱の延長線上にくる。そのため、掘立柱建物SB444の付属施設と考えられる。掘立柱建物SB444の主柱穴は不整形である。このため、柱の抜き取りが行われたと考えられる。また、主柱穴の埋土には焼土や炭が混じる。このため、掘立柱建物SB444は火災で焼け、その後柱の抜き取りを行ったと考えられる。

２　久保川遺跡の奈良時代の景観について

（１）奈良時代の流路について

久保川遺跡では、２本の流路を検出している。久保川遺跡の北側を西から東に流れる流路（流路A）と久保川遺跡の中央を西から東に流れる流路（流路B）である。昭和40年測図京都市都市計画図を用い、発掘調査で検出した流路をつなぎ合せることによって奈良時代の流路の復元を行った。

流路Aは、鳥居前古墳試掘調査（大山崎町教委2015）、R463次調査（第３章第７節）、R1132次調査（大山崎町教委2017b）、R402次調査第Ⅰ期第７トレンチ、第Ⅰ期第８トレンチ、第Ⅱ期第４トレンチ、第Ⅱ期第５トレンチ、第Ⅱ期第６トレンチ、（大山崎町教委1994）で検出した。特に、R463次調査の流路NR08からは古墳時代前期に比定される土師器が出土している。人工的に掘削された溝の可能性も考えられる。これらの調査成果をつなぎ合せると、流路Aは鳥居前古墳周辺を水源として端ノ池、新池、中池、大池を通って現在の町道西法寺里ノ後線をほぼ踏襲するように復元できる流路である。R402次調査第Ⅱ期第４トレンチでは流路の上層から中世（13世紀）に比定される土器が出土する土坑SK01を検出した。また、R216次調査（第３章第７節）では、掘立柱建物やピットを検出した。これらの遺構の年代は出土した遺物から13世紀に比定される。このことから、当流路は13世紀の段階には埋まっており、土地利用がされていたと考えられる。中世に流路が埋まる要因としては、端ノ池、新池、中池、大池の成立との関係がうかがえる。また、この流路Aの北側で行った調査では、奈良時代の遺構・遺物を確認しない。このことから、この流路Aが奈良時代の生活圏の北限であったと考えられる。

流路Bは、R786次調査（大山崎町教委2006）、R884 次調査（大山崎町教委2007）、R563次調査

（大山崎町教委1997）で検出した。これらは、現在の久保川の流れが踏襲しおり、旧久保川の河道を検出したと考えられる。

（２）奈良時代の遺構について

当調査地は、久保川遺跡の範囲にあたる。今回の調査で検出した竪穴建物や掘立柱建物とほぼ同時期の奈良時代の平城宮出土土器編年Ⅲ～Ⅳの時期に比定される遺物が出土した調査として、R735次調査（大山崎町教委2006）、R884次調査、R873次調査（大山崎町教委2008）、R894次調査（大山崎町教委2008）があげられる。このことから、奈良時代の久保川遺跡の範囲は流路Aを北限、R894次調査地の中央部あたりを西限とすることが分かる。また、R735次調査の遺構面の標高は約21m、R884次調査の標高は約19.5m、今回の調査地の標高は約21.5m、R873次調査の標高は約24mである。このことから、南から北西にむかって下がる地形条件であることが分かる。

流路B以北の調査地であるR735次調査とR884次調査では州浜を検出しており、庭園遺構であると評価されている。R735次調査で検出した州浜とR884次調査で検出した州浜が一帯の州浜であるとすると検出範囲だけでも東西約90m、南北約40mを測る。広大な庭園の復元となるため慎重な検討が必要であるが、上位の階層の人びとの存在が想定される。R735次調査は800㎡を調査し、コンテナ約８箱分の遺物が出土した。特徴的な遺物として、自然石に呪術的な文字や文様を記した墨書石、火付け木がある。R884次調査は350㎡を調査し、コンテナ約６箱分の遺物が出土した。特徴的な遺物としては、風字硯があり識字層の存在も想定される。

流路B以南の調査地であるR873次調査とR894次調査は遺構が非常に希薄である。R873次調査は1141㎡を調査し、コンテナ約80箱分の遺物が出土した。特徴的な遺物として、「大宅」や「麻呂」等の文字が墨書された土師器が21点がある。R894次調査は518㎡を調査し、コンテナ約18箱分の遺物が出土し、その大半は調査区の西半部から出土した。

今回の調査地では、竪穴建物１棟、掘立柱建物１棟、柵列１条を検出した。調査面積は193㎡であり、コンテナ約６箱分の遺物が出土した。

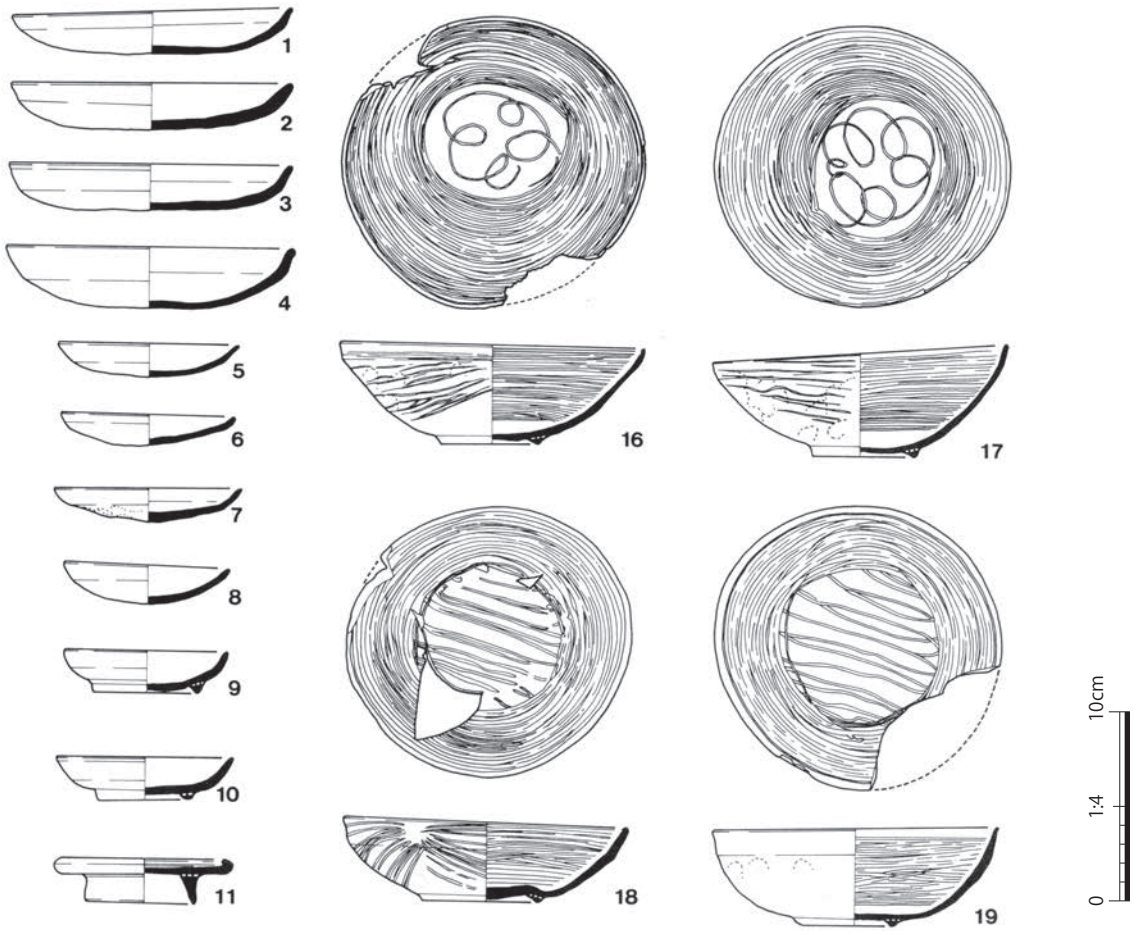
以上から、流路B以北では少量の遺物を消費し、庭園としての土地利用行われた。流路B以南では大量の遺物を消費し、生活空間としての土地利用が考えられる。今回の調査地は、竪穴建物と柵列を伴う掘立柱建物を検出した。出土遺物は土師器、須恵器等であり、墨書などは施さない。R735次調査では遺構は希薄であるが、墨書土器が出土した。R735次調査地は本調査地に比べて標高が高い場所に位置している。このため、一案としては居住者の階層差が想定される。

３　まとめ

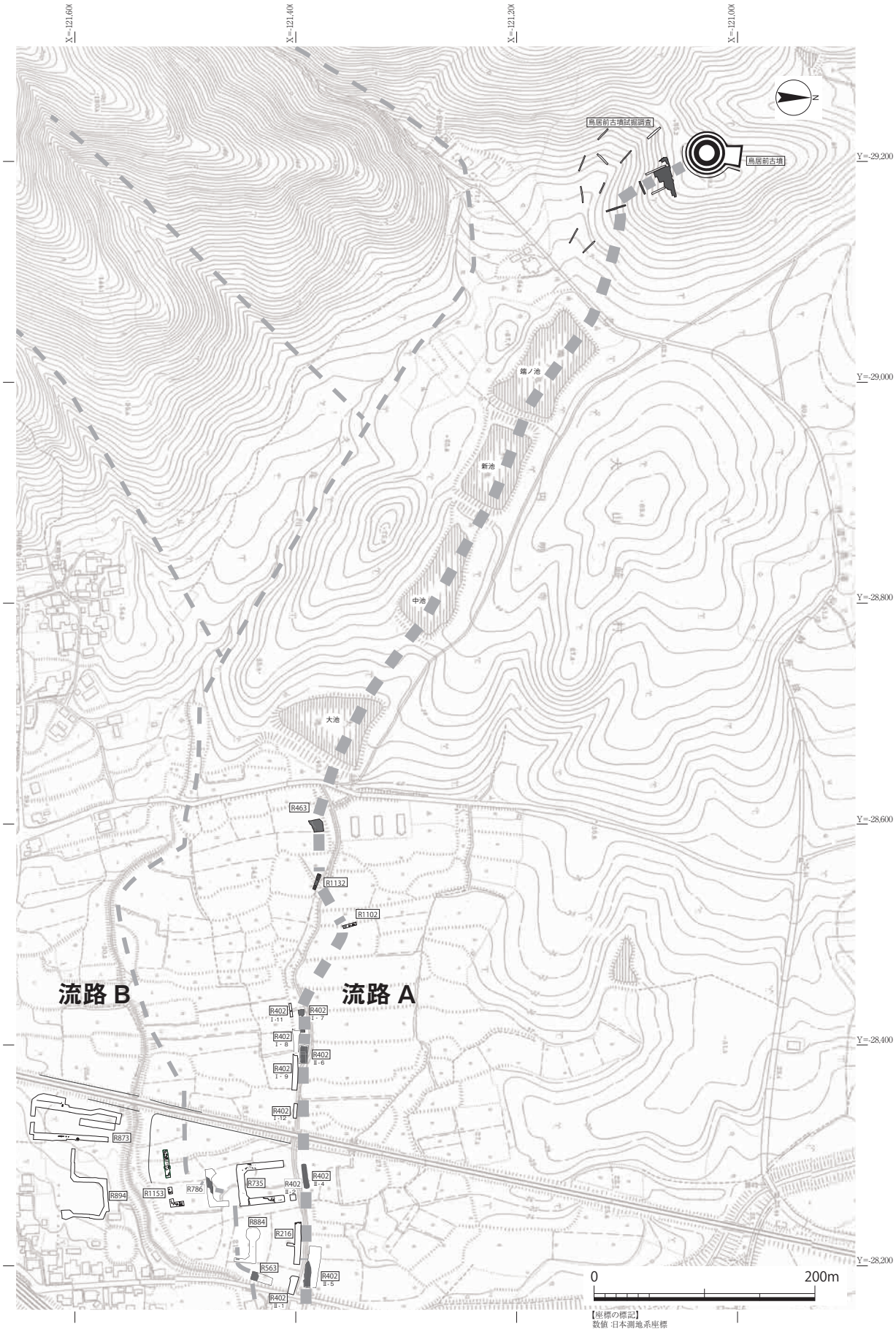
今回の調査で、竪穴建物や柵列を伴う掘立柱建物を検出した。大山崎町域で奈良時代の竪穴建物の検出は初である。植物園北遺跡（高橋1993、京都府センター2014）では、奈良時代の竪穴建物を12棟検出された。２～３棟が１単位として立地する。このことから、調査区外に竪穴建物が存在する可能性が想定される。今回の調査で出土した遺物の時期は、周辺の調査区で出土した遺物の時期とほぼ同時期である。このことから、久保川遺跡の範囲が現在の久保川の両岸にまたがっていることが分かった。また、奈良時代時代の流路Aと流路Bを復元した。流路Aは、久保川遺跡の生活圏の

北限であると考えられる。流路Bは久保川遺跡の土地利用の境界となっていると考えられる。

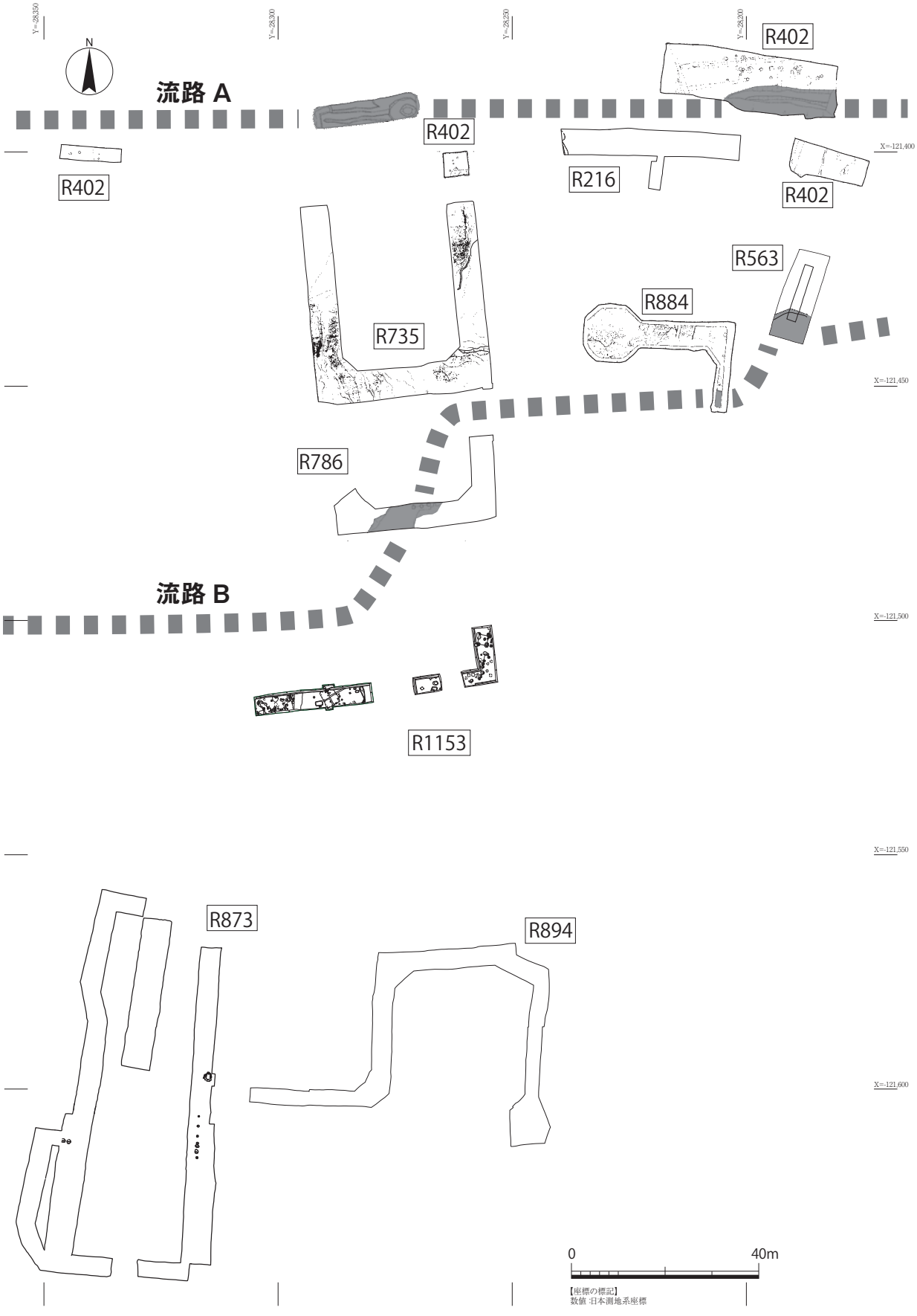
今回は、奈良時代の久保川遺跡の景観について考察を行った。中世になると流路Aの上位に遺構が検出される。また、久保川遺跡全域に遺構の分布が見られる。このことから、今後は中世の久保川遺跡の景観についても考えたい。



第 43 図　R402 次調査土坑 SK01 出土遺物（大山崎町教委 1994 の一部）



第 44 図　奈良時代の流路（1/5,000）



第 45 図　奈良時代の久保川遺跡（1/1,200）

【註】

註１　グリット18～15（石積遺構SX108以西）を第１調査区、グリット10～15（石積遺構SX108より東）を第２調査区とする。

註２　管見の限りであるが、乙訓地域で平城宮出土土器編年Ⅲ期の土器が一括して出土した遺構として、ピットP279次調査SK27901があげられる（國下、橋本1994）。

註３　『平城宮発掘調査報告書』Ⅶ 1976年所収の土坑SK820出土土器のものである。土坑SK820は平城宮出土土器編年Ⅲ新段階の基準資料とされている。

註４　以下平安京土器編年には、小森1994、小森・村上1996を参照する。

【参考文献】

岩崎誠1996「山城西部（乙訓）」古代の土器研究会編『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』真陽社

近江俊秀1995「瓦器椀」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

大山崎町教育委員会1994『長岡京跡右京第402次発掘調査概報』（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第12集）

大山崎町教育委員会1997『大山崎町文化財年報』平成８年度

大山崎町教育委員会2006『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第33集

大山崎町教育委員会2007『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第35集

大山崎町教育委員会2008『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第37集

大山崎町教育委員会2015『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第45集

大山崎町教育委員会2017a『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第48集

大山崎町教育委員会2017b『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第49集

大山崎町教育委員会2017c『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第51集

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター2014『京都府遺跡調査報告集』第159冊

國下多美樹、橋本勝行1994「長岡宮跡第279次（７ANEYT地区）～朝堂院朝庭、乙訓郡衙跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第38集　（公財）向日市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会

森俊寛1994「土師器・黒色土器・瓦器」（財）古代学協会・古代学研究所『平安京提要』角川書店

小森俊寛・村上憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所

鋤柄俊夫1995「各地の瓦質土器」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

高橋潔1993「山背北部における奈良時代竪穴住居跡について」『杉山信三先生米寿記念論集　平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会

奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告書』Ⅶ（『奈良国立文化財研究所学報』第二十六冊）真陽社

奈良国立文化財研究所1995『平城京長屋王邸跡左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』吉川弘文館

米田敏幸1991「土師器の編年　１近畿」『古墳時代の研究』６　雄山閣

〔凡例〕
法量は、[ ] が復元値、( ) が残存値を示す。
粒土は、最大粒度を示し、( ) 内には普遍的なもののうちで大形粒度長を示した。
鉱物の表記は、それぞれ石：石英、チ：チャート、雲：黒雲母、赤：赤色斑粒、黒：黒色粒として示し、原則として量の多いもの順に表記した。
残存度は、原則的には、口縁部の残存度を示した。

表３　R1153 次調査出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量（cm）			色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考
					口径	器高	底径			（内面）	（外面）			
1	21	2Tr SH201 ⑯	土師器	杯	[18.4]	(3.7)	-	内外面）5YR5/3 にぶい赤褐 断面）5YR5/3 にぶい赤褐	密 3(1) 長、チ	ヨコナデ、ヨコナデのち放射状暗文、ナデのち暗文	ヨコナデ、ケズリ、オサエのちナデ	硬	K2/5、T1/1	
2	22	2Tr SH201 ⑭	土師器	椀	[13.9]	4.0	-	内外面）7.5YR5/2 灰褐 断面）5YR6/4 にぶい橙	密 2(1) 雲、長、石	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、オサエ	硬	9/10	
3	31	2Tr SH201	土師器	甕	-	(4.8)	-	内外面）10YR8/3 浅黄橙 断面）10YR8/3 浅黄橙	密 2(1) チ、赤、長	ナデ	ナデ、ハケ	硬	破片	
4	29	2Tr SH201	土師器	甕	-	(4.4)	-	内外面）7.5YR7/6 橙 断面）7.5YR7/4 にぶい橙	密 2(0.5) 長、チ、石、赤	ヨコナデ、ハケか	ヨコナデ、ハケか	硬	K 破片	
5	28	2Tr SH201	土師器	甕	[15.4]	(4.3)	-	内外面）10YR5/2 灰黄褐 断面）2.5YR6/6 橙	密 2.5(1.5) チ、石、長	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケか	硬	K2/5	
6	30	2Tr SH201	土師器	甕	[16.2]	(4.8)	-	内外面）10YR7/2 にぶい黄橙 断面）10YR7/2 にぶい黄橙	密 2(1) 長、チ、石	ヨコナデか、ナデか	ヨコナデか、ナデか（全体的に磨滅）	軟	K1/6	
7	33	2Tr D-10 断割 3 層	土師器	甕	[24.0]	(6.5)	-	内外面）2.5YR5/4 にぶい黄褐 断面）10YR8/2 灰白	密 3(1.5) チ、石、長	ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	軟	K1/5	
8	35	2Tr SH201 ②④⑤⑧⑨	土師器	甕	[26.4]	(21.8)	-	内外面）10YR7/3 にぶい黄橙 断面）10YR7/3 にぶい黄橙	密 3(1) チ、長、赤、石	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ（ほぼ磨滅）	やや軟	K1/4	
9	36	2Tr SH201 ①②⑥⑧⑨⑩	土師器	甕	[26.5]	(28.9)	-	内外面）7.5YR6/4 にぶい橙 断面）7.5YR6/4 にぶい橙	密 3(1) チ、長、石、赤	ヨコナデ、ハケのちナデ	ヨコナデ、ハケ	硬	K1/4	黒斑
10	25	2Tr SH201 ⑩	土師器	甕	[26.4]	(11.3)	-	内外面）7.5YR7/6 橙 断面）10YR8/4 浅黄橙	密 3(1) 長、チ、石	ヨコナデ、ハケ、オサエ、あて具痕	ヨコナデ、ハケのちヨコナデ、ハケ	硬	K1/6	
11	27	2Tr SH201	土師器	甕	[29.2]	(6.2)	-	内外面）10YR7/2 にぶい黄橙 断面）7.5YR7/4 にぶい橙	密 3(1) チ、石、長	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	硬	K1/12	
12	26	2Tr SH201 ⑩	土師器	甕	[30.2]	(8.9)	-	内外面）7.5YR7/4 にぶい橙 断面）7.5YR7/4 にぶい橙	密 3(1.5) チ、長、赤	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケか	軟	K1/8	
13	34	2Tr SH201 ①⑤⑧⑨⑪	土師器	甕	[30.8]	(26.4)	-	内外面）10YR7/2 にぶい黄橙 断面）10YR8/2 灰白	密 2.5(1) チ、長、石	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ	硬	K1/24	
14	4	2Tr SH201 ⑮	須恵器	杯 A	[13.2]	3.0	[8.5]	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 (0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切りのちナデ	硬	K1/6、T1/5	
15	3	2Tr SH201	須恵器	杯 B	[13.8]	4.0	[10.0]	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 1(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切りのちナデ	硬	K1/8、T1/6	
16	2	2Tr SH201 ⑬	須恵器	杯 B	[15.6]	4.0	[11.4]	内外面）7.5Y7/1 灰白 断面）7.5Y7/1 灰白	密 1(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切りのちナデ	硬	K2/5、T1/2	底部外面墨痕
17	5	2Tr SH201	須恵器	蓋	[13.4]	(2.0)	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 2(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ヘラ切りのちナデか、回転ヘラケズリ、ロクロナデ	硬	K1/6	
18	1	2Tr SH201 ⑫	須恵器	蓋	15.4	2.9	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 2.5(1) 長、チ	ロクロナデ	ツマミ貼付時のナデ、ヘラ切りのちナデ、ヘラケズリ、ロクロナデ	硬	K3/5	
19	38	2Tr SH201	製塩土器		-	(3.3)	-	内外面）7.5YR7/4 にぶい橙 断面）N3/0 暗灰	密 3(1.5) 石、チ、長	ヨコナデか、ナデ	ヨコナデか、ナデ	硬	K 破片	
20	37	2Tr SH201	製塩土器		-	(4.9)	-	内外面）10YR5/4 にぶい黄褐 断面）2.5YR5/1 黄灰	密 3(1) 長、チ	ナデ	ナデ	硬	K 破片	
21	24	1Tr SD103 北半	土師器	皿	-	(2.6)	-	内外面）5YR7/6 橙 断面）5YR7/6 橙	密 1(0.5) 長、チ	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	硬	K 破片	
22	15	1Tr SD103 北半	須恵器	皿	[16.0]	2.8	-	内外面）N7/0 灰白 断面）2.5Y8/1 灰白	密 1.5(0.5) 長、石、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切りのちナデ	硬	K1/11	
23	12	1Tr SD103 南半	須恵器	蓋	[11.2]	1.8	-	内外面）N6/0 灰 断面）10YR6/1 褐灰	密 3(1) 長、石、チ	ロクロナデ	ツマミ貼付時のナデ、ヘラ切りのちナデ、ロクロナデ	硬	K3/5	
24	14	1Tr SD103 南半	須恵器	蓋	[15.2]	(1.6)	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 (0.5) チ	ロクロナデ	ツマミ貼付時のナデ、ヘラ切りのちナデ、ロクロナデ	硬	K1/8	
25	17	1Tr SD103 北半	須恵器	蓋	-	(1.5)	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 (0.5) 長	ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ、ロクロナデ	硬	K 破片	
26	16	1Tr SD103 北半	須恵器	蓋	[20.0]	(1.4)	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 1(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ヘラケズリ、ロクロナデ	硬	K1/8	

表３　R1153 次調査出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量（cm）			色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考
					口径	器高	底径			（内面）	（外面）			
27	6	1Tr SD103 北半	須恵器	蓋	[19.4]	2.7	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 3.5(1) 長、チ	ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ、ツマミ貼付時のナデ、ヘラ切りのちナデ、回転ケズリ、ロクロナデ	硬	K1/8	
28	39	1Tr SD103 北半	製塩土器		[15.0]	(5.6)	-	内外面）2.5YR5/3 黄褐 断面）2.5YR5/2 暗灰黄	密 4(1) チ、長、石	ナデ	ナデ	硬	K1/8	
29	8	2Tr SD209 北側	須恵器	杯 B	[15.6]	3.9	[12.0]	内外面）N5/0 灰 断面）N5/0 灰	密 1.5(1) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切り・爪圧痕	硬	K1/4、T2/5	
30	7	2Tr D10 3 層 (SD209 付近)	須恵器	蓋	[14.4]	(2.6)	-	内外面）7.5Y7/1 灰白 断面）10YR5/2 灰黄褐	密 1(0.5) 長、石	ロクロナデ	回転ケズリ、ケズリ、ロクロナデ	硬	K1/10	
31	10	2Tr D10 3 層 (SD209 付近)	須恵器	鉢	[29.0]	(8.9)	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 3(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ	硬	K1/12	
32	11	2Tr SD207	須恵器	蓋	[16.4]	(2.3)	-	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 1(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ヘラ切りのちナデ、ロクロナデ	硬	K1/4	
33	19	2Tr S ピット P218	須恵器	杯 A	[14.2]	(3.8)	[10.2]	内外面）2.5Y5/1 黄灰 断面）2.5Y8/2 灰白	密 1.5(0.5) 長、チ、赤	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切りのちナデ	軟	K1/8、T1/4	
34	18	2Tr S ピット P225	須恵器	杯 B	-	(3.3)	[13.2]	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 2.5(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台、ヘラ切りのちナデ	硬	T1/3	
35	32	3Tr SK304	土師器	甕	[28.4]	(8.9)	-	内外面）5YR6/6 橙 断面）5YR6/6 橙	密 2.5(1) 赤、チ、長、石	ヨコナデ、ハケ、板ナデ、タタキ	ヨコナデ、ハケ	硬	K1/6	
36	20	1Tr D15 区 3 層	須恵器	杯 B	-	(2.2)	-	内外面）N5/0 灰 断面）N6/0 灰	密 1(0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付高台	硬	T 破片	
37	40	1Tr D15 区 3 層	緑釉陶器	椀	-	(1.8)	[7.2]	内外面）深黄緑、N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 (0.5) 長	ミガキのち施釉	回転ケズリ、削り出し高台、回転ケズリ	硬	T1/2	
38	41	1Tr D15 区 3 層	緑釉陶器	皿か	-	(1.6)	[8.0]	内外面）明るい黄緑 断面）2.5YR7/3 浅黄	密 (0.5) 長、石	ミガキのち施釉	ケズリのち施釉、削り出し高台	軟	T2/5	
39	43	1Tr D15 区 3 層	瓦	平瓦	長さ (10.5)	幅 (8.5)	厚 (3.1)	凹面、凸面)2.5Y8/3 淡黄 断面)N4/0 灰	密 (1) 長、赤	凹面）磨滅の為調整不明	凸面）縄目、ケズリか	やや軟	破片	
40	23	4Tr C1 区 2 層	土師器	皿	[9.8]	(1.4)	-	内外面）7.5YR8/4 浅黄橙 断面）7.5YR8/4 浅黄橙	密 1.5(1) 赤、長	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、オサエ	硬	K1/4	
41	42	1Tr SD101	瓦器	椀	-	(0.8)	[5.8]	内外面）N3/0 暗灰 断面）N8/0 灰白	密 (0.5) 長、石	ミガキか	ミガキか、貼付高台、ナデ	硬	T1/6	
42	9	2Tr D10 区 2b 層	須恵器	杯 A	[13.4]	3.4	8.4	内外面）N7/0 灰白 断面）N7/0 灰白	密 (0.5) 長、チ	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切りのちナデ	硬	K1/12、T3/4	外面部分的に墨痕か

表４　R216 次調査出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形
1	C001	SD01	須恵器	蓋
2	C005	7 区 SK102	須恵器	椀
3	C002	7 区 SK102	須恵器	甕
4	E009	SK01 2 区	土師器	皿
5	E011	SK01 2 区	土師器	皿
6	E014	P02	土師器	皿
7	E006	P016	土師器	皿
8	E007	P03	土師器	皿
9	E010	P010	土師器	皿

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形
10	E012	P09	土師器	皿
11	E003	P09	土師器	皿
12	E004	P016	土師器	皿
13	Z006	P04	瓦器	皿
14	Z001	P09	瓦器	椀
15	Z008	P016	瓦器	椀
16	Z007	P012	瓦器	椀
17	Z011	SK02	瓦器	鍋
18	Z010	SK03	瓦器	脚

表５　R463 次調査出土遺物観察表

報告番号	実測番号	遺構層位	器種	器形	法量（cm）			色調	胎土	調整		焼成	残存度	備考
					口径	器高	底径			(内面）	(外面）			
1	2	NR08	土師器	高杯	15.7	(5.9)	-	内外面：5YR7/6 橙 断面：7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 5(1) 長、石、チ、赤	ヨコナデ、磨滅のため調整不明瞭、ナデ	ヨコナデ、磨滅の為調整不明瞭	やや軟	K3/5	
2	3	NR08	土師器	壷	[16.7]	(13.6)	-	内外面：7.5YR7/6 橙 断面：7.5YR7/4 にぶい橙	やや粗 3(1) 長、石、チ、赤	ヨコナデ、磨滅の為調整不明瞭	ヨコナデ、ハケか磨滅の為調整不明瞭	やや軟	K1/4	
3	1	NR08	土師器	壷	[16.0]	(11.8)	-	内外面：5YR7/6 橙 断面：5YR8/4 淡橙	やや粗 3(1) 長、石、チ、赤	磨滅の為調整不明瞭	磨滅の為調整不明瞭	やや軟	K2/5	
4	4	3 層 2Z 区	打製石器	剥片（2 次加工のある剥片か）	長 6.5	幅 3.6	厚 2.2	-	-	-	-	-	-	重 33.8g サヌカイト

図 版

1．調査前風景（南西から）

2．第１調査区４層上面全景（南から）

1．第１調査区４a 層掘削後全景（南から）

2．西壁断面（東から）

3．4a 層掘削状況（西から）

3．遺物出土状況

1．第２－１調査区全景（北から）

2．第２－２調査区全景（南から）

1．第２調査区全景（南から）

2．第２－１調査区壁断面（東から）

3．第２－２調査区壁断面（東から）

4．第３調査区第１遺構面全景（北から）

1．第３調査区第２遺構面全景（北から）

2．第３調査区 SD01（東から）

4．第３調査区壁断面（東から）

3．第３調査区 SD02（東から）

5．第３調査区壁断面（東から）

R1151 次調査出土遺物

1．R468 次調査第 1 遺構面空中写真

2．R468 次調査第 2 遺構面全景（北から）

3．R468 次調査出土遺物

1．調査前風景（南西から）

2．調査前風景（南東から）

1．第１調査区第２遺構面全景（西から）

2．第１調査区第３遺構面全景（西から）

1．石積遺構 SX108 全景（東から）

2．石積遺構 SX108 壁断面（南東から）

3．石積遺構 SX108 壁断面（南東から）

4．石積遺構 SX108 壁断面（北東から）

5．石積遺構 SX108 と溝 SD101（北から）

6．溝 SD101 全景（南から）

7．第 1 調査区壁断面（南から）

第１調査区、第２調査区第３遺構面全景（東から）

1．第２調査区全景（東から）

2．第２調査区壁断面（南から）

1．竪穴建物 SH201 掘削前（北から）

2．竪穴建物 SH201 掘削中（南から）

1．竪穴建物 SH201 全景（北から）

2．竪穴建物 SH201 全景（南から）

1．竪穴建物 SH201 上位甕出土状況（北から）

2．竪穴建物 SH201 甕出土状況（西から）

3．竪穴建物 SH201 下位甕出土状況（北から）

4．竪穴建物 SH201 竈検出状況（北から）

5．竪穴建物 SH201 竈検出状況（北から）

6．竪穴建物 SH201 竈検出状況（南から）

7．竪穴建物 SH201 竈検出状況（南から）

8．竪穴建物 SH201 竈断面（西から）

1．ピット P228 断面（東から）

2．ピット P231 断面（西から）

3．ピット P229 断面（東から）

4．ピット P230 断面（西から）

5．竪穴建物 SH201 断面（南東から）

6．竪穴建物 SH201

7．竪穴建物 SH201 掘削風景

8．竪穴建物 SH201 の竈掘削風景

1．第３調査区全景（西から）

2．調査区の位置関係（東から）

1．第４調査区遺構検出状況（北から）

2．第４調査区遺構掘削状況（北から）

1．第４調査区遺構検出状況（南から）

2．第４調査区遺構掘削状況（南から）

1．第４調査区壁断面（東から）

2．第４調査区全景（北から）

R1153 次調査出土遺物

R1153 次調査出土遺物

1．R216 次調査第 1 遺構面全景（西から）

2．R216 次調査第 2 遺構面全景（西から）

3．R216 次調査出土遺物

1．R463 次調査全景（南から）

2．流路 NR08 全景（南から）

3．流路 NR08 断面（西から）

4．R463 次調査出土遺物

ふりがな	おおやまざきちょうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
副書名	長岡京跡右京第 1151 次調査・長岡京跡右京第 1153 次調査
巻次	
シリーズ名	大山崎町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 52 集
編著者名	角早季子
編集機関	大山崎町教育委員会
所在地	〒 618-8501　京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目３番地　電話 075-956-2101(代)
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
百々遺跡（どどいせき） 長岡京跡（ながおかきょうあと）	大山崎町字円明寺（おおやまざきちょうあざえんみょうじ）小字茶屋前 16 ほか、小字鉄電（こあざてつでん）36、38	26303	18・20	34° 54′ 14.70″	135° 41′ 15.35″	170105-170220	177	宅地開発
長岡京跡（ながおかきょうあと） 久保川遺跡（くぼかわいせき）	大山崎町字円明寺（おおやまざきちょうあざえんみょうじ）小字里ノ後（こあざさとのしろ）1-1、2-1	26303	18・21	34° 54′ 26.65″	135° 41′ 15.98″	170130-170331	193	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百々遺跡 長岡京跡	集落 都城	古墳時代、中世	流路、溝	土師器・須恵器	弥生・古墳時代の遺物を含む流路を検出。
長岡京跡 久保川遺跡	都城 散布地	奈良時代	竪穴建物、掘立柱建物、柵列、ピット	土師器・須恵器・製塩土器	奈良時代の竪穴建物、掘立柱建物、柵列を検出。

平成30年（2018）３月21日　印刷
平成30年（2018）３月30日　発行

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第52集
—長岡京跡右京第1151次調査—
—長岡京跡右京第1153次調査—

編集・発行　大山崎町教育委員会
〒618-8501　京都府乙訓郡大山崎町円明寺夏目３
電話075-956-2101（代表）

印　刷　　三星商事印刷株式会社
〒604-0093京都市中京区新町通竹屋町下ル
電話　075-256-0961（代表）